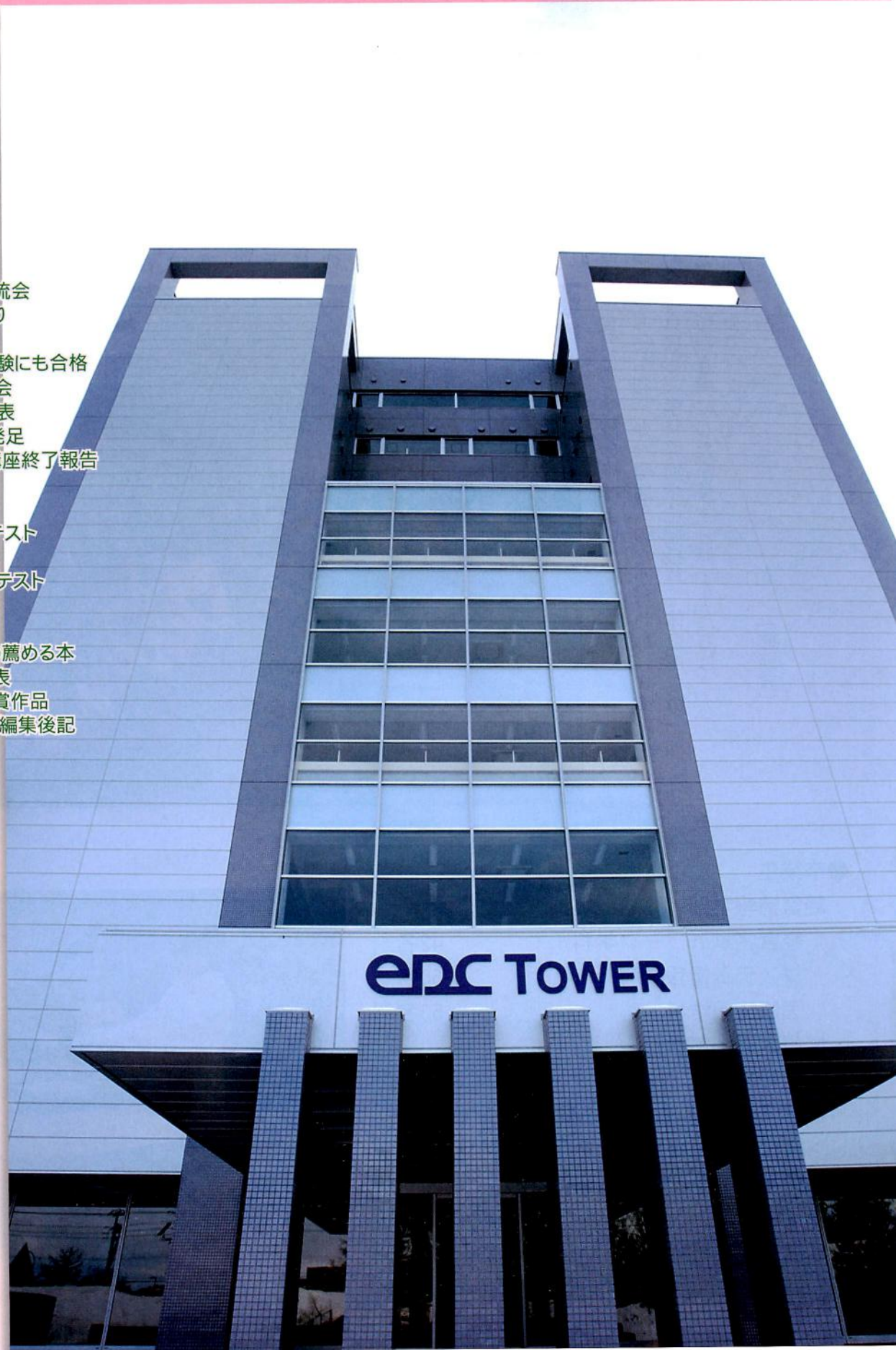
Nanakamado vol.51

ななかまど

北海道情報大学 学内報 2011(H23).03.31 発行

目 次

02■学位記授与式
03■退任教員あいさつ
08■eDCタワーが完成
10■教育GPフォーラム
12■UCSCレポート
14■留学生との文化交流会
16■サポートセンターより
19■留学生の史興君、
応用情報技術者試験にも合格
20■留学生の餅つき大会
21■大学院生が学会発表
22■学習支援センター発足
24■平成22年度公開講座終了報告
26■ゼミ紹介
27■クラブ紹介
28■Webデザインコンテスト
10年の歩み
30■プログラミングコンテスト
31■第8回囲碁大会
32■Library News
33■Library News 私の薦める本
36■第3回図書館賞発表
38■第3回図書館賞受賞作品
48■大学主要行事等／編集後記



写真／3月、本学に完成したeDCタワー

発行：北海道情報大学
〒069-8585
江別市西野幌59-2
TEL 011-385-4411
FAX 011-384-0134

祝辞を述べる松尾理事長

平成22年度
学位記授与式 挙行

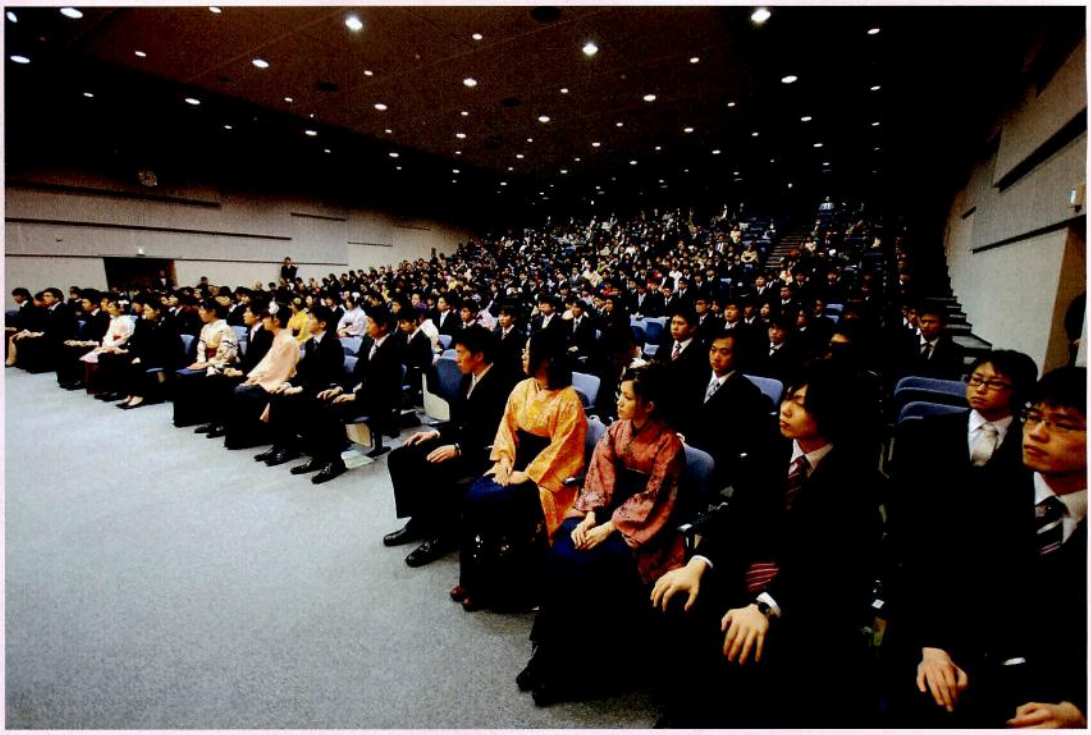
3月18日(金)午前10時から、本学松尾記念館講堂において、平成22年度北海道情報大学学位記授与式が行われました。

経営情報学部第十九回、情報メディア学部第七回、通信教育部第十四回、大学院第十四回の合同で行われた式の模様は、会場に設置されたテレビカメラにより、全国の各教育センターにも同時中継されました。

今年度は開式前に、この度の東日本大震災でお亡くなりになられた方々に哀悼の意を表し、黙祷を捧げました。

式は、厳粛なうちにも和やかな雰囲気のなか行われ、式後には、卒業記念写真撮影、学科等別学位記授与、体育館での謝恩会と続き、学位記を手にした卒業生・修了生たちは、大学との別れを惜しんでいました。

(総務課)



●卒業生

・経営情報学部

経営ネットワーク学科	42名
システム情報学科	60名
医療情報学科	53名

・情報メディア学部

情報メディア学科	109名

・経営情報学部 通信教育部

経営学科・経営ネットワーク学科	42名
情報学科・システム情報学科	290名

●修了生

・経営情報学研究科	7名

卒業生答辞

コンピュータと私

システム情報学科教授　角井　穆

退職までの二十三年間は、コンピュータという技術革新の激しい分野で教育と研究に従事してきたため、瞬く間に過ぎました。

開学時に導入されたのがＩＢＭの大型情報システムであり、当時はコボルやフォートランが使用されていたことからも、今までの技術革新の激しさがわかります。

現在もコンピュータは新しい局面を切り開いています。それは、世界インフラ（世界の土台）としてのコンピュータを中心としたシステムの運用です。

コンピュータが世界インフラとして運用され、国にかわってコンピュータが世界の秩序と発展を支援するまでに進化したのです。その結果として、平和共存と国際協力と貿易自由化が促進されているのです。本学における外国の大学との提携や外国人留学生の受け入れもそのひとつの例です。

しかし、多くの人々は、コンピュータがあまりにも身近な存在であるため、世界インフラについて理解していません。いつも学習や仕事に使用しているコンピュータが、システムとしては世界インフラであるということが実感できないのです。その例が、電子書籍という言葉です。

電子計算機という言葉は、今では使われなくなった過去の言葉です。ところが、電子書籍という言葉も電子計算機という言葉と同様に、過去の言葉です。

書籍も新聞も放送番組も映画も音楽も、すべてがサイバースペースで融合されて人類が共有して発展しているのが現在の状況です。電子書籍とか電子新聞というのは、時代遅れです。電子映画とはいわず、映画のデジタル化というほうが理解しやすいのです。すべての文化（書籍・絵画・映画・演劇・音楽・建築など）がデジタル化されています。デジタル化というのは、ファイルとして扱うということでもあります。

サイバースペース文化は、知識ベース・セマンティックウエブ・デジタルミュージアムとして構築され運用されています。

私が世界インフラにまで進化したコンピュータに気づいたのは、経営情報システムが国際標準化されたからです。

長い間、経営情報システムは、それぞれの企業が自前で開発していました。

いまでは、国際標準化された経営情報システムがクラウドコンピューティングによって数千数万もの組織に提供され共有されています。そのことで、信頼性も向上しています。

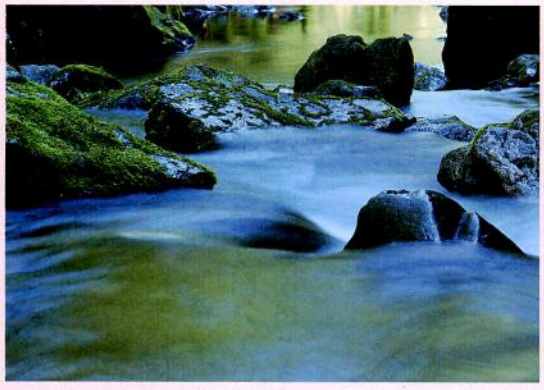
こうした技術革新を支えているのがサービス指向アーキテクチャです。

教育については、開学当初はロータスを使用して、その後は現在にいたるまでマイクロソフトエクセルを使用して、システム分析の実習をおこなってきました。

最初のロータスやエクセルは、フロッピィディスク一枚に収まっていました。学生が一人一人、一枚のフロッピィディスクを使用して実習をおこなっていたのです。

システム分析は、科学研究・技術開発・ビジネスに共通する分析法であり、システム開発の最初の段階でもあります。

国際標準化されたシステム分析の方法が世界中の大学で教育され、大学で教育を受けた人々が年々増加しています。したがって、民族や宗教や言語の違いにかかわらず相互理解・合意形成・協力が促進されているわけです。その結果が、世界インフラの運用として現れています。



退職に当たって

医療情報学科特任教授　加納　邦光

本学には特任教授の二年を含めて、十年間、お世話になりました。この間、いろいろなことがありましたが、特に印象深かったことを述べさせていただきます。

私は「Ｙｏｓａｋｏｉソーランサークル」、「ダブルダッチ」、「イベントサークル」などの顧問をしましたが、「Ｙｏｓａｋｏｉソーランサークル」の顧問になることを依頼されたとき、どうせなるなら、「自分も学生と一緒に踊りたい」と思いました。しかし何せ高齢者の域に達していましたので、学生の踊りにすぐにはついていけないと思い、予行演習ということで、「エアロビクス」をやりました。若い女性のインストラクターの指導の下、「エンヤトットー」と練習したのですが、哀れ、三日目に「六十肩」になってしまい、腕が高く上がらなくなり、赴任早々黒板に字を書くと「痛た・・、痛た・・」ということにあいなってしまいました

「ドイツ語」の授業では、語学教育を通して学生の「視野」や「国際性」を広げようと思い、その一環としてドイツの状況を写したヴィデオやドイツ映画などを見せたりもしました。「ビギナーズセミナー」では、教養教育の教員として学生の「人間性」や「社会性」を育て、深めることが大切と考え、ＮＨＫ放映の「プロジェクトＸ」や「プロフェッショナル」などのヴィデオを見せ、学生に感想を書かせたり、発表させたりして、「ポートフォリオ」の走りみたいなことをしました。先ほどのヴィデオ教材ですが、「ドイツ語」の授業でも「ビギナーズセミナー」でもかなりの録画を行い、「ドイツ映画」でも北海道では一番のストックを残したと自負しておりますが、いかんせん、ほとんどが時代遅れの［ＶＨＳ］であるのが、残念です。

それから元学長の井野先生から「これは依頼ではなくて、命令であり、拒否権はない」と言われて「教養主任」となりましたが、これが大変でした。なにせ、「コンピュータには弱い」、「事務能力はない」、「司会の能力はない」と、「ない、ない」尽くしで本当に多くの方々にご迷惑をおかけし、また大変お世話になりました。改めて心からお礼申し上げます。

私の研究についてですが、本来の研究テーマは別にあったのですが、本としてまとまったのは、ドイツ帝国を創立した『オットー・フォン・ビスマルク』の伝記と若くして亡くなったドイツの作家、『ヴォルフガング・ボルヒェルト』の伝記です。『ビスマルク』の方は私が本学に赴任した年に出版となりましたが、これは前任校での仕事と言えます。本学に勤務中で完成したのは、『ヴォルフガング・ボルヒェルト』の伝記です。

本学の広報誌である『ななかまど』の「私の薦める一冊の本」に、あえて私はこの「ボルヒェルト」の全集と伝記を挙げました。

これは皆さんや学生諸君とのお別れの気持ちとともに、ドイツ文学ではマイナーですが、若い人たちにこの作家を知っていただきたいという思いがあったからです。戦争と牢獄と病気という悲惨な体験ばかりの青春で、二十六歳の若さで亡くなりましたが、彼の短編には実に豊かな人への優しさ、愛が込められています。現代の日本は物質的には豊かと言えますが、本当の豊かさということではどうでしょうか。むしろ「迷い」と「混迷」を深めていると言えないでしょうか。そのような思いから現代を生きていく「手がかり」を彼の作品から感じ取っていただければと思い、紹介したわけです。

それでは皆さん、どうぞお元気でそれぞれの仕事、研究、勉学に益々のご発展とご活躍を、また特に若い人たちはこれからどんなに辛い体験をすることがあっても、「希望」を失わずに「未来」を切り開いていくことを切に願い、退職の挨拶とさせていただきます。

退任教員あいさつ

退職にあたって

医療情報学科講師　田中　洋也

平成20年4月より三年間、北海道情報大学にお世話になりました。本学着任前の十四年間は高校教員として教育に携わってきましたが、本学での三年間は外国語教育を研究のフィールドとする私にとって、新たなチャレンジを与えてくれる場となりました。普通教室、コンピュータ実習室とそれぞれの環境で授業を行えたことは、外国語学習を成立させるための授業内外の学習連携について様々な方法を試みる機会となりました。また、授業に参加してくれた学生からのフィードバックは、授業実践改善や新たな研究テーマ創出に大きな力を与えてくれました。こうした経験ができたこともひとえに、学生、事務職員、教職員の皆様のご理解とご協力があったからと感謝しております。

平成23年4月からは北海学園大学に赴任し、人文学部専門基礎科目、共通外国語科目を担当します。本学での三年間の経験を礎に、専門領域に一歩近づいたところで外国語環境での学習支援、多文化社会で活躍できる人材育成に貢献できるよう精進する所存です。三年間、大変お世話になりました。ありがとうございました。

お世話になりました

先端経営学科教授　福島　吉春

北海道情報大学には七年間お世話になった。これを七年もというべきか七年しかというべきか悩んでしまう。

最初に当時学長であった久野光朗先生からお誘いを受けたとき「情報大学の定年は七十才だ」といわれたが、四月から実際に勤務しはじめると「六十八才になった」と告げられた。久野先生としては残念だという意味だったと思うが、小生はとくに何も考えなかった。六十八才と七十才という二年間がそんなに違うとは思わなかった。というか、そんなに長く務めようとは考えていなかった。

むかし、二十八才で教員になったので、けっきょく三十三年間教員を続けたことになる。今から考えるとよく続いたな、というのが実感である。

最初に教員（務めたのが国立大学だったので、正確には文部教官）に採用されたとき、いつまで務めるか考えたのを覚えている。

まず江戸時代の事務関係の武士、いわゆるソロバン侍の退職年齢である還暦（一般に数え歳で六十才）。ま、ここまで務めれば最低の義務は果たすなと考えた。

次は六十三才、これは最初に勤務した国立大学の定年退職年齢である。

その後、六十五才から年金支給が始まることを知って、六十五才も仕事を辞める時期の候補になった。

浅学非才の身で、しかも体力や気力に自信がなかったので、早めに区切りを付けるべきだという思いは変わらなかった。

そんな小生が「七年も」か「七年しか」というべきか判らなくなるまで勤めができたのは同僚（であった方々も含めて）諸先生ならびに諸事務員の方々のおかげだと今さらながら感謝する次第である。

本当に、お世話になりました。

開学時から今まで

システム情報学科教授　林　雄二

平成元年の開学から今まで、大学の発展と共に過ごした二十二年間、思い出は尽きません。

情報大は、開学からしばらくの期間、グランド、クラブ施設、学生の居場所など、ないない尽くし、校舎はあってもキャンパス(campus)があるとはいえない状態でした。そのような環境だったからこそ、特に一、二期生の学生には、大学を自分たちが作るという気概が感じられました。連綿と引き継がれてきた大学祭や体育祭を最初に立ち上げた有志には、闇の中、手探りで道を拓く努力であったに違いありません。特に敬意を表します。

〈サッカー部の顧問〉

一期生の大越君や中村満宏君らがサッカー部を立ち上げるに際して、私が顧問を引受けました。グランドとして使えたのは、今のテニスコートのある場所、猫の額ほどの草むらです。この草むらや体育館で、たまに私も学生と一緒にボールを蹴ったものです。もちろんサッカーゴールもありません。そこで、大学に要求して、移動式のキック板二面(日本でもほとんど例がないと思います)の予算を付けてもらいました。設計図を私が作成し、江別工業団地を訪ね某工務店に製造してもらいました。ひとりで練習ができるので、サッカー部の学生(や私)が時折使用していましたが、キック板が夜毎に倒れているのです。誰の悪戯かと憤慨しましたが、実は、板にかかる風圧で倒れ易い構造になっていたのです。私の設計ミスでした。現在のグランドができた時には廃棄されましたが、犠牲者がでなくてよかったと胸を撫で下ろしています。

〈情報処理の資格取得対策〉

開学から三、四年経過して、情報処理の国家試験に取り組む学生も増えてきました。学生の意欲をさらに掬いあげようと、私が提案して、対策講座を開くことにしました。専門学校と競うのではなく、大学なりのやり方で取り組みたいと思いました。専門学校ではなく、大学で取得したのだから評価されるものと考えています。正直のところ、合格者数という結果を直接求めることは本意ではありません。資格取得を目指すという気持ちが、大学の科目への意欲や動機づけになってくれればいいと思っています。

夏休みや春休み、あるいは放課後に、情報系の先生方に協力をしてもらい、対策の講座を開設してきました。最近、遠藤先生が、eラーニング教材を開発して下さいましたので、さらに効果が上がっていくことと思います。一昨年からは、誕生した学習支援センターが資格対策を引き継いで、ようやく実施母体ができたことはうれしいことでした。

〈担当した授業〉

授業では「プログラム設計」、「アルゴリズム論」、「プログラム言語論」などの情報系科目をはじめとする幾つかの科目を担当してきました。情報処理という学問の基礎は、コンピュータサイエンスです。サイエンスとは、物理、生物、化学、数学など、自然界を解き明かそうというもの。一方、コンピュータは人間の作りだしたものですが、敢えてサイエンスと名づけられているのは、コンピュータには、解明しなければならない性質がたくさん含まれているということです。従来の数学を適用できないこの新しい学問の教育を担当できることに、私は幸運を感じてきました。

授業では、学生が理解しただけで終わるのではなく、問題解決まで出来ることを目標に掲げてきたつもりです。「解った」と「出来る・解ける」との間には距離があります。脳内の異なるスレッドによる活動でしょうから。当初から、授業時間内に如何にして学生に技術を身につけさせるかを心していました。授業では、学生が聴き放しになるのではなく、演習に時間を割き考えさせることを重視して進行してきました。最近は、さらにPOLITEなどの学習サイトを活かして、授業外での学習を促すことをも目指すようにしています。授業アンケートで、ある学生が「先生は本当にプログラム設計という科目を愛しているんだなと思った」と書いていました。いつも授業アンケートでは低い評価を受けることに甘んじていますが、意気込みを感じてくれた学生がいたことは嬉しいことです。

〈学生諸君へ〉

学生諸君には、授業を通して学ぶことはもちろん、仲間から学び、仲間と共に学び、刺激を与え合う機会をもっと作って欲しいと思います。新しいeDCタワーには、ラーニングコモンズ(Learning Commons)、すなわち図書館を中心とした自学やグループ学習の環境が用意されますので、大いに活かして、実りある大学生活を過ごしてくれることを願っています。

退職にあたって

医療情報学科教授　原　暉之

本学には五年間在職しました。それに先立って十六年間を公立、十九年間を国立の大学で過ごしていましたので、合計四十年間の教員生活をこの三月末で終えることになります。

振り返ってみれば、全期間を通じて最も充実した時間を過ごすことができたのはこの五年間だったことを実感します。このような仕事の場を与えてくださった理事長をはじめ理事会の諸先輩、法人本部と大学事務局の職員の皆様、同僚の先生方には、たいへんお世話になりました。この場をお借りして、厚くお礼を申し上げます。

本学との縁は、今から十二年前にさかのぼります。忘れもしません。それは1999年(平成11年)9月3日のことでした。ある偶然から本学の創立十周年記念式典に参加し、北海道大学総長の名代としてお祝いのメッセージを述べることになったのです。当時私は大学図書館に籍を置いてその管理運営にかかわっておりました。館長任期の一期目では「大学図書館における電子図書館的機能の充実」という課題に取り組みましたが、二期目に入る頃から「大学図書館における学術情報流通機能の強化」という難しい課題に直面するようになっていました。大学の教育研究は、情報のシステムとリテラシーとコンテンツの三本柱に支えられていなければ十分な展開を図ることができない、という持論を抱くようになったのもその頃のことでした。縁あって五年前に本学に赴任したときの抱負は、十二年前に松尾記念講堂の壇上で述べさせていただいたメッセージの延長上にあったように思います。赴任の直後から、主として教養教育の場で、情報の三本柱に支えられた教育の構想について同僚の先生方と真剣に議論したことをよく覚えています。

二年目から副学長という大役を仰せつかりました。二年間の任期中、とくに印象に残るのは初年次教育をどのように位置づけるか、という問題に取り組んだことです。全学的なカリキュラム改訂は少し先の将来に設定されていましたので、それに先立ってまずは初年次教育の導入部の刷新からはじめることにしました。08年度に発足した「スタートアッププログラム」がそれです。08年度には、大学の地域貢献の一環として「地域学講座」も始めました。「ふるさと江別の歴史と文化・再発見」と称し様々な切り口から地域に光をあてる公開講座です。三年連続でかかわった地域の再発見は、私の研究生活にとっても非常に大切な経験となりました。国際交流委員長としては、タイのラジャマンガラ工科大学との協定の締結、瀋陽師範大学との協定の更新を手掛けました。タイの先生方との交流行事も瀋陽への出張も楽しい思い出として残っています。

高機能の図書館を備えたeDCタワーの竣工という新時代の開幕を告げる節目を見届けて本学を去ることが出来るのは、五年間在職した私にとって、このうえなく嬉しいことです。本学の今後の発展を祈ってやみません。

が完成

一昨年より、設計・建設工事が進められておりました『eDCタワー』が完成し、平成23年3月17日(木)に竣工式が執り行われました。当日は、平成23年3月11日(金)に発生した東日本大震災の被災された人々に配慮し、直会を中止し、式典だけが行われ、式典終了後参列者全員で黙祷を捧げた後、松尾理事長が建築に携わった方々に謝辞を述べられ終了しました。

完成した『eDCタワー』は、十階建てで、

松尾理事長

eDCタワー

一階は「大学記念ギャラリー」となっており、入口正面には百号の絵画が左右に一点ずつ飾られています。二階の「カフェレストラン」は百三十二席配置された学生食堂となっています。三階は「学生プラザ」となっており、「自習室」、「多目的室」などがあり、学生の自習やグループ学習に利用できるようになっています。また、『eDCタワー』の三階と『松尾記念館』の二階は「スカイウェイ(連絡通路)」で結ばれており、建物内だけで移動できるようになっています。「スカイウェイ」にはテーブル・椅子が配置され、学生の休憩場所となります。

四階～六階は図書館となっており、「閲覧コーナー」、「ラーニング・コモンズ」、「情報プラザ」などがあり、静かな中での図書閲覧、情報学習が可能な環境となっています。七階は「ゼミ室」が六室設置され、二十人前後の少人数での学習ができます。八階は「システム制御実習室」、「プロジェクトルーム」などが配置され、実習環境が整えられています。九階には「大学院生室」、「講義室」などがあり、大学院生の学習・研究環境が整備されています。十階は「展望ラウンジ」となっており、来賓の方などが見えられたときにお迎えするフロアーとなっています。また、十階からは西北に暑寒別岳などの暑寒別連峰、東北に夕張岳などが見えるなどすばらしいロケーションとなっています。

北海道情報大学の学生は、このような新しい施設・設備の中、勉学や研究に励んでくれるものと期待しております。

各階 案内図

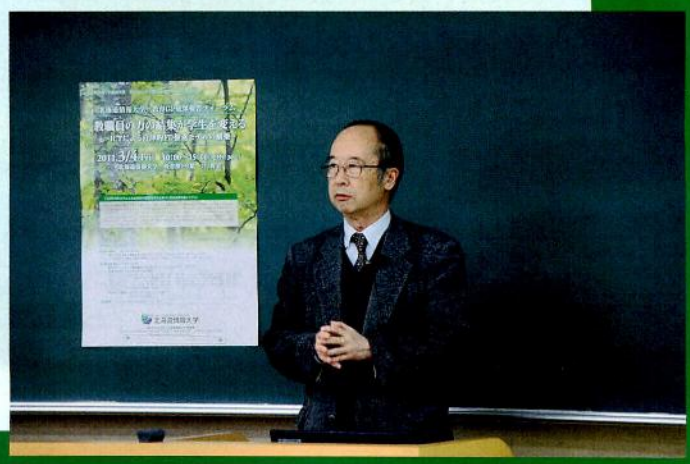
フォーラム開催される

FD委員会・WG4　谷川　健

本学が平成20年度の教育GPに採択された「ICTによる自律的FD推進モデルの構築」の取組みも本年度が最終年度となり、三年間の成果報告を兼ねて平成22年度北海道情報大学教育GP成果報告フォーラムを平成23年3月4日に、本学の211教室で開催しました。

前日から、吹雪模様の大荒れの天気となり、交通機関が乱れるな中、多くの方の参加を得て、ほぼ予定通り終了することができました。本学の近藤事務局長の司会のもと、本学学長の長谷川先生の開会のあいさつの後、二人の先生の講演がありました。最初に、法政大学の常盤祐司先生から「ICTを活用した教育の現状と展望」についての講演がありました。この講演では、大学におけるICTの利用には、戦略的活動、組織的活動、教育活動の様々な面での利用があること、継続して発展が見込まれるICTを効果的に活用し、時代に即した特色ある教育を進めることの必要性、戦略的な活動、組織の活性化、授業支援などの多岐にわたる法政大学の事例紹介、大学が主体的にICT環境の構築をすすめることの重要性およびそれを支える大学ITシステム構築のための知識体系の紹介などがありました。特に、多くの教員に使ってもらうシステムにするには、ICTに対しての知識が少ない教員も比較的容易に使えるシステムを提供することが重要であることが示され、そのためにはそれぞれの大学にあったシステム開発を大学主導で開発することがとりわけ重要であることが指摘されました。山形大学の小田隆治先生からは「健全な教育改善と組織力を目指すFD」についての講演がありました。この講演では、FDは健全な学生の主体的かつ持続的な学習力の向上を目指す教育改善と学生・教職員の主体性が発揮される健全な組織力を目指すもの、FDは大学が主体的に取り組むもの、相互研鑽を目的とし公開性と共有化を特徴とする山形大学のFDの取組みの紹介などがありました。山形大学のピアレビュー（公開授業&検討会）の取組みにおける学生主体、あくまで授業改善の取組みであるという考え方は、本学のピアレビューにも大きく影響を与えています。

午後は、本学の副学長の冨士先生から本学の三年間の取組みの概要について説明があり、九つのWGのリーダから各WGの三年間の取組みと今後の課題等について報告がありました。これらの報告では、三年間の教育GPの取組みを通じて、FD支援システムであるCANVAS(Creative Activity for Nurturing Value-Added Students (by using a Faculty Development



教育GP成果報告

support system)）の開発およびそれを使ったFD活動の試行、FD委員会およびWGを中心にした新しい組織の整備、新しいカリキュラムやGPAやチューター制度などの新しいビジネスモデルの確立などによって、教育イノベーションの緒についたことが示されました。また、FD委員会およびWGの活動は、教育GP終了後も継続的に取り組むことが示されました。

続いて、教育GPの取組みに協力していただいた学生から二つの報告がありました。最初は、本取組の中心的な役割を果たすFD支援システムであるCANVASの開発に関わったシステム情報学科四年生の谷口恭進君から、学生が開発したシステムの概要、開発環境の概要、谷口君が開発したシステムの詳細、実際に活用されるシステム開発に携わることで学べることの重要性と苦労等について報告があり、教員に対してCANVASの有効利用へのお願いがありました。次に、二年前から本学で取り組んでいる学生FDの中心的メンバーである経営ネットワーク学科四年生の大久保翼君と情報メディア学科二年生の知久貴大君から学生がFDに関わる意義、これまでの活動の概要、今後の活動予定、この活動を通じて他大学の学生との情報交換で学んだことなどについて報告がありました。二組の学生の発表では、学生がこれらの活動に参加する中で大きく成長した姿を見ることができました。

FDフォーラム終了後、関係者が集まり、教育GP推進協議会およびFD評価委員会が開催されました。この評価委員会では、本学のFD活動の取組みについて、活動を継続させるためや学生に自ら学ばせるためのいくつかのアイディアが示されました。本学のFD活動が学生中心に展開されている点やCANVASを核とした先駆的なシステムを開発し活用している点が評価されました。一方、基礎学力の定着、教育の質の保障、CANVASを利用した本格的な全教員によるFDの取組みなどが今後の課題であることが指摘されました。

三年間の教育GPの取組みでFD支援システムCANVASを開発し、平成22年度はほぼ全教員がCANVASのいくつかの機能を使って教育の質の向上を目指すことができました。CANVASを使って教育活動のPDCAを実施することや、このことにより学生の満足感やアウトプットの質の向上を達成するには、今回のフォーラムのテーマとして挙げた「教職員の力の結集が学生を変える」に従って教職員一人一人が自覚を持って努力していくことが重要であると考えます。平成23年度からのCANVASの本格運用では、教職員が一丸となり学生に真の満足感を与えていければと思います。

情報メディア学科 准教授　斎藤　一

ISSでのレセプションの様子

た、開発中のやきものに関するWeb[8]のＡＩコンテンツの完成と、プロジェクト・マネージャを育成するＥラーニングに関する研究の英論文化を進めました。前者については情報処理学会[9]および観光情報学会[10]で、後者については、先日、カナダで開催されたED-MEDIA2010[11]という国際会議で発表をすることができました。この報告につきましては、先日配布されました教育ＧＰニューズレター[12]を参照いただければと思います。

UCSCは、たくさんの留学生を受け入れてきており、留学生とも交流できたことも良い経験となりました。留学生の支援を行っているISS(International Student Service)では、UCSCに留学または研究にきている日本人に対するレセプションも、開いていただきました。

４カ月という滞在期間でしたが、妻と２歳になった息子と一緒に渡米することができましたので、ハロウィン、サンクスギビングデイ、クリスマス、そして、年越しと、家族で楽しいイベントも経験することができました。サンタクルーズ内の公園には、子供とよく遊びに行きましたが、アメリカでは、皆が子供によく話しかけ、一緒に遊んであげています。日本のように叱りつけている親が一人もいなかったことがとても印象的でした。レンタカーの手続きでトラブルがあったり、子供が休日に急に熱を出しＥＲ(緊急病棟)に行ったり等、様々なこともあり、毎日英語の試験のような生活で緊張もしましたが、それらも含め全て本当によい経験になりました。

最後になりましたが、お世話になりましたPohl先生、Jhala先生をはじめ、UCSCのスタッフの方々に感謝申し上げます。また、留学のアドバイスをいただいた谷川先生、研修中にゼミ生の面倒を見ていただいた、隼田先生、安田先生、向田先生をはじめ、情報メディア学科の先生方、このような留学の機会をいただきました関係各位に改めまして感謝申し上げます。

UCSCの正門にて

参考文献・サイト
[1]HIU-NAVI, http://mccprj1.do-johodai.ac.jp/hnavi/(2009).
[2]EIS, http://eis-blog.ucsc.edu/.
[3]Unity, http://unity3d.com/.
[4]ArnavJhala氏のホームページ, http://users.soe.ucsc.edu/jhala/.
[5]PacmanOnline, http://pacman.com/.
[6]スーパーマリオ25周年キャンペーン, http://www.nintendo.co.jp/mario25th/top.html
[7]ChrisLewis, JimWhitehead, RuntimeRepairofSoftwareFaultsusingEvent-DrivenMonitoring, (2009).
[8]やきもの魂、http://www.do-yakimono.jp/.
[9]斎藤一, 星健太郎, 向田茂, 川田尚紀, "地域の観光資源を有効活用するためのサイトデザインに関する検討-SOMに基づいた北海道江別市の「やきもの」の特徴分析-", 情報処理学会創立50周年記念(第72回)全国大会講演論文集, pp. 4-547-548, 2010. 03.
[10]斎藤一, "北海道江別市の「やきもの」の特徴を分析するWebコンテンツの試作", 第7回観光情報学会全国大会(川越市), p. 18, 2010. 06. 04.
[11]HajimeSaito, YoshitomiMorisawa, TakeshiTanigawa, MasatakaFukui, TakayukiHoshino, "DevelopmentofanEducationalProgramthatUses E-LearningforProjectManagerVirtualJobTraining", ProceedingsofED-MEDIA2010, pp-366-373, Toronto, Canada, 2010. 0701.
[12]斎藤一、ED-MEDIA2010国際会議レポート、北海道情報大学・教育GPニューズレター、Vol. 6、(2010)

アメリカ短期研修報告

私は、平成21年９月14日から、平成22年１月16日までの125日間、アメリカ・カリフォルニア大学サンタクルーズ校(UCSC)において約4カ月の短期研修を受けさせて頂きました。現在、私が所属する情報メディア学科では、P-in-P(PersoninPresentation)を導入した3DCGによる高度なWeb表現を、学生中心のプロジェクトとして、実現できるまでになってきています[1]。

しかし、今後、さらなる高度なメディア表現を実現するためには、単にデザイン系のソフトウェアや機材を使いこなすだけではなく、新たな表現を生み出すバックボーンとなる理論を改めて研究していくことや、ゲームやメディアアートといった、インタラクティブ性を伴う最新のコンテンツについて、調査・研究を行っていく必要があると考えていました。UCSCでは、情報工学および情報科学に関する研究実績が豊富であり、EIS(ExpressiveIntelligence Studioat University of California)[2]と呼ばれる、ゲームに代表される最新のメディア表現に関する研究所があります。研修を依頼しましたIraPohl先生は、情報工学および情報科学に関する研究実績が豊富な上、また、チェスに代表される、ゲーム等の情報科学の幅広い分野で、多くの業績を持っておられます。本学との提携校としての契約は、平成20年度で終了しておりましたが、平成20年度にUCSCに同じく短期研修をされました、谷川先生をはじめ、多くの方々のご支援もあり、UCSCおよびIraPohl先生の許可をいただき、このたびの研修を実現することができました。

渡米後、研究内容について、再度、Pohl先生に直接相談させていただき、UCSCで行われている、様々な研究に目移りしましたが、やはり、人工知能によるインタラクションとアート・デザイン、そして、ゲームに関する研究が数多く行われている、EISの方々にお世話になることにしました。

UCSCで研究を行ったEIS所属研究員の研究室もあるEngineering2

EISでは、主にArnavJhala先生[4]に大変にお世話になりました。偶然にも、Jhala先生は、今回お世話になった大学寮の同じ棟に住んでいらっしゃいましたので(UCSCには、広大な敷地内に多くの大学寮があります)、登下校時も含め、お忙しい中、いろいろと相談にものっていただきました。Jhala先生からは、研究の事例として、三次元版のパックマン[5]のデモをみせていただきました。通常、二次元でプレイするパックマンを三次元化することで、マップを見る角度により、見える部分と見えない部分が出てきます。複数人のユーザが、ネットワークを通じて、様々な視点から(自分の視点から見える)情報を共有することで、協調的にゲームを進める、新たなゲームとなります。このゲームはJavaで開発されているそうです。尚、ゲームの開発や研究は、学部学生ではなく、大学院生が行っていました。学部学生は、JavaやC++等のオブジェクト指向言語で、プログラミングを習得するそうです。大学院生は、ゲーム開発の言語(C#やUnity[3]等)をほとんど独学で習得するそうです。印象的だったのは、私達にとってもとてもなじみのあるゲームの一つである、スーパーマリオブラザーズ[6]が、ゲーム開発の入門的サンプルになっていて、それを改良しながら、ゲーム開発を学んでいたことです。EISの大学院生、ChrisLewis君は、ゲーム中のエラーをイベントのモニタリングにより自動でデバックするという研究をしていました[7]。例えば、マリオのジャンプできる高さが、通常よりも二倍(マリオの弟のキャラクタであるルイージと同等)になってしまっていたとき、それをゲーム進行中に自動で修正し、通常のジャンプ力に戻します。その他、選択肢をボタンで選択していくようなロールプレイングゲーム(シリアスゲーム)を、自然言語によるテキスト入力(将来はマイクからの音声入力)でも、同じようにプレイすることができるように改良していく研究や、ネットワークゲームのキャラクタの行動を集約し分析をするためのネットワークゲームのハブの構築等、興味深い着眼点で研究を進めていました。私自身は、これまでにゲーム開発のノウハウがないため、そう簡単にゲームの研究ができるとは考えていませんが、こういった、EISの研究の姿勢といいますか着眼点を、情報メディア学科のインタラクティブなコンテンツ開発に生かしていきたいと考えています。

UCSCでの私の自身の研究として、日本ですすめてき

第1回留学生との文化交流会

外国人留学生委員会委員長　竹内　典彦

昨年12月21日火曜の午後六時から二時間、外国人留学生委員会が主催し、「第一回留学生との文化交流会」を119教室にて開催しました。

内容は、中国で大ヒットしたコメディ映画「非誠勿擾(日本題「狙った恋の落とし方」)」の一部を鑑賞して、中国と日本両国の文化の共通性や相違点を、感想として発表しました。なおこの映画は、北海道ロケを含むもので、中国での北海道ブームのきっかけとなった映画です。

ストーリーは、「発明により大金を手にした男性が、婚活をして、中国の各地で様々な境遇の女性とお見合いをした末に、一人の女性と北海道旅行をしながら愛情を育んでいく」という、いわゆるラブコメディーです。

当日は、幸いにも、留学生四十七名（中国四十六名、タイ一名）、日本人学生二十一名、教職員六名の、計七十四名に参加していただきまして、大へんな盛況ぶりでした。飲み物とお菓子も用意されまして、映画館で鑑賞するような気分を、味わってもらえたのではないでしょうか。

本学も年ごとに留学生の人数が多くなりつつありますが、留学生と日本人学生（教職員を含む）との文化交流の場は、これまであまり多くなかったと思います。このようなイベントを通して、留学生と学生や教職員との交流が一段と深まり、また留学生の日本語能力向上の一助になれば幸いです。

映画の終了後、何名かの学生が、映画の感想を発表して、意見交換する

ことができました。また、三十三名から回収した、学生のアンケート結果では、「とても楽しかった」が二十三名、「少し楽しかった」が七名、「普通」が三名、「あまり楽しくなかった」と「全く楽しくなかった」は〇名でした。

次に、学生の感想を一部ご紹介します。日本と中国の文化の違いを指摘する意見もありましたが、あまり違わない、と感じた学生もいたようです。

「ロケ地ツアーにも参加したので映画がすごく楽しく感じた」
「知床はとてもきれい」
「笑えるシーンがたくさんあった」
「セリフの中国語が、日本語に翻訳されると、面白くなくなっているところがあった」
「留学生と話合うことができてよかった」
「機会があればまた参加したいと思った」
「セリフの内容がストレート過ぎて、日本人の会話とは違うなと思った」
「日本人と中国人では笑うところが違うと思った」
「中国人の冷たい冗談は、日本人には理解できないと思った」
「この映画では、日本と中国の文化の違いは感じなかった」

時間の関係上、全てを上映することができず、やむを得ず一部早送りをしましたが、これは観る人にとって、とても残念だったと思います。それでも、「次は日本のアニメを見たい」とか「日本の映画を見たい」、「毎月一回やって欲しい」という次回に期待する前向きな意見が多くありました。また「楽しかった」という意見がほとんど（三十三名中三十名）でしたので、内容をもう一度検討して、次の「文化交流会」を準備したいと考えています。

学サポ

学生サポートセンターからのメッセージ

就職活動は充実した大学生活から

文部科学省が発表した「就職内定状況調査」によると、２０１１年春卒業予定の大学生の就職内定率は２月１日時点で就職氷河期と呼ばれた２０００年前後も下回る七七・四％（前年同期比二・六％減）と、調査を開始した１９９６年度以降で最低となりました。また、厚生労働省が３月に発表した「労働経済動向調査」によると、２０１１年春卒業予定の大学生に内定を出した企業の割合は、文系が前年比一ポイント減の三一％、理系は一ポイント減の三二％でいずれも三年連続で前年実績を下回りました。この就職氷河期の再来は、すぐに改善する兆候はなく、恐らく２０１２年春、さらにそれ以降の学生も厳しい就職活動を強いられることになるかもしれません。

厳しい現状を紹介しましたが、それでは企業や病院が採用選考時に重視する要素、つまり学生に求める能力は何でしょうか？

経団連が行っている「新卒採用時に関するアンケート」によると、第一位は「コミュニケーション能力」、第二位は「主体性」、第三位は「協調性」、以下「チャレンジ精神」、「誠実性」、「責任感」となっています。これらの能力は残念ながら、一朝一夕で得られる能力ではありません。つまり、就職活動がスタートする際に、すぐに身につけようと思っても難しく、四年間の大学生活の中で意識的に会得しなければなりません。

就職を担当する学生サポートセンターでは、就職支援以外にも皆さん方の様々な活動をサポートする役割を担っています。記載したような能力は、在学中に自覚的に行動しなければ身に付けることが難しいものです。大学を足場にして、例えば部活動やサークル活動に熱中し、各種コンテストやプロジェクト活動、資格取得などにも挑戦し、もちろん一生懸命勉強をする。またアルバイトに励むことも良い社会経験になるでしょう。そして多くの生涯にわたる友人を作り、結果として、就職活動の際に必要となる能力を身に付け、最終的に納得できる就職をするということが理想です。このような活動を学生サポートセンターでは、積極的に支援していきたいと思っています。皆さんには、ぜひこの施設、設備を大いに活用し、教職員との関わりを多く持ち充実した大学生活を送って欲しいと願っていますし、充実した大学生活を送れる学生であれば、社会人になっても活躍できる人間になると思います。

新四年生の皆さん、就職活動の調子はどうでしょうか？　面接、筆記試験など皆さんが今まで経験したことがないような高く厚い壁が立ちはだかっているのではないでしょうか。この、厳しい就職活動でのヒントを一つ紹介したいと思います。以前、面接の際にあることを意識して行うようにしてから、内定が出るようになったと就職活動を終了した学生が言ってました。それは、

・笑顔を作るようにする
・具体的に話すようにする
・緊張しないようにするため少し身振り手振りを付ける
・意識的にテンションを上げるようにする
・最後の質問に食らいつく

です。これらを行うことにより随分印象が変わるようになったと言ってました。以上のヒントの中で、自分でも意識的にできると思ったことがあれば、ぜひやってみてください。最後に、就職活動で何か困ったこと、分からないことがあればいつでも学生サポートセンターへ相談に来てください。

学サポ

東京で大学説明会を開催

平成23年2月21日(月)東京中野サンプラザで「北海道情報大学　大学説明会」を開催しました。

この説明会の目的は、主に首都圏に本社がある企業等に対し、本学の現状や教育内容の説明と学生からの研究発表等を通して、本学が目指している教育研究の方向性やその内容

を理解していただき、昨今の就職環境が厳しい中、学生の就職に結びつけていくことにあります。

説明会は、松尾　泰理事長の就職でお世話になっている日頃のお礼と、ｅＤＣタワー建設などについて強いメッセージを込めた挨拶で始まりました。続いて長谷川　淳学長から本学の現況や特色、教育目的や国際交流への取り組みなどについて説明を行いました。

学生の研究発表では、システム情報学科四年　服部　裕樹君から「ｉＰａｄによる電子書籍と電子ノートの融合」、情報メディア学科四年　岩本　陽介君から「アイヌ文化を知るためのホームページとカルタ制作」の発表があり、続いて情報メディア学科四年　橋本　佳奈さんと鹿児島教育センター四年　大津　一馬君が卒業生代表の挨拶を行いました。

その後、特別講演として日本マイクロソフト株式会社の鳴坂　仁志様から「クラウドビジネスの現状と将来展望」と題して、クラウドコンピューティングの概要やマイクロソフトのクラウド戦略、またクラウドの課題と方向性などについてご講演をいただきました。クラウドビジネスは今後急速に成長することが見込まれるため、ＩＴ系の企業のみならずあらゆる業界が注力するところであり、出席企業の方々にとって有益な情報となったと思います。

説明会後の懇親会は、中村　忠之就職部長の挨拶、そして出席企業を代表して株式会社パソナ取締役会長　真瀬　宏司様の乾杯のご発声により始まり、企業と大学関係者、全国の教育センター長が就職状況や次年度の採用等について情報交換を行いました。各企業の方々からは、不透明な経済の先行きにより、次年度も厳選採用を行うといった声が多く聞かれ、就職活動は苦戦を強いられると感じましたが、この情報交換で得た企業の生の情報をより多くの学生に伝え、学生の就職活動をサポートしていきた

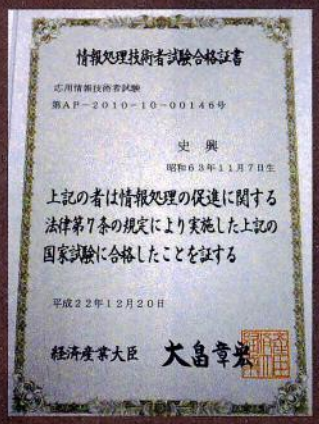
いと考えます。最後に冨士　隆副学長の締めの挨拶で大学説明会を終了しました。

この大学説明会は毎年開催しており、今年度で十五回目を迎えました。今回参加していただいた企業は百八十三社、参加者数は二百五十五名で、関係者の皆様方のご支援により盛会裡に所期の目的を達成することができました。

企業・病院説明会を開催

平成23年3月3日(木)京王プラザホテル札幌で、北海道情報大学主催「企業・病院説明会」を開催しました。説明会は合同説明会方式で、平成24年3月に卒業予定の学生が興味を持っている企業、病院のブースをまわり、概要や特徴、求人条件、採用日程等を伺うという形で実施しました。四十一企業、四病院に参加していただき、就職を希望する学生のほぼ全員が出席する形で、盛大に行われました。参加した企業の方からは、コミュニケーション力をもっとつけて欲しい、精神的に強い人間になって欲しいなどの御意見をいただきました。学生の皆さんが早期に就職に対する高い意識を持ち、積極的に活動を行い、夏休み前を目標に内定、そして就職を決めることを期待しています。

留学生の史興君、応用情報技術者試験にも合格


情報処理技術者試験合格証書

応用情報技術者試験

第AP－2010－10－00146号

史 興

昭和63年11月7日生

上記の者は情報処理の促進に関する法律第7条の規定により実施した上記の国家試験に合格したことを証する

平成22年12月20日

経済産業大臣 大島章宏

国際交流・
留学生支援事務室
室長　今長　豊

平成22年10月に実施されました、経済産業省主催の秋期「応用情報技術者試験」に情報メディア学部、情報メディア学科の三年生に在籍している留学生の史興(SHI XING)君が合格しました。

史興君は平成21年4月に南京大学より本学の二年生に編入学し半年後の10月に実施された情報技術者試験の「ITパスポート試験」に合格、翌平成22年4月に実施された「基本情報技術者試験」に合格、そして今回の応用情報技術者試験にも、みごと合格しました。

今回、史興君に情報技術者試験のことや趣味などについてインタビューをしました。

Q1　情報技術者試験を受験するきっかけはどんなことですか？　なぜ、受験しようと思いましたか？

A1　留学直後に勉強する上での目標のひとつとして室長に勧められたからです。

Q2　どのようにして勉強(学習)しましたか？

A2　一年目はほぼ独学でした。試験の時はまだ高度な授業を受けていないので。

Q3　どれくらい勉強(学習)しましたか？（授業以外で一日何時間くらい？）

A3　夏・春休みの暇なときにちょっとずつ勉強して、試験前の一～二週間は一日数時間で突撃しました。

Q4　どんな本(教科書・問題集・参考書)で勉強しましたか？

A4　ITパスポートと基本情報は室長から譲っていただいた教科書を、応用情報のほうはネット上の関連情報を参考にして、「応用情報技術者　合格教本」という毎年更新出版される参考書を中心に勉強しました。

Q5　これから受験する学生の皆さんにアドバイスしてください。

A5　普段の授業を「受講」(受身で授業を聴く)してはダメだと思います。教えられた内容を「受け止める」だけなら、どんなに頑張っても自分の力にはならないから。ちゃんと授業の内容を理解して、その知識と技能を自分のものとして身につければ、授業だけでも受験するには十分だと思います。「受身の受講」態勢ではなく「自分から勉強する」態勢で臨むべきだと思います。

Q6　次ぎは何に挑戦しますか？　情報技術者試験以外でも、なんでも結構です

A6　具体的にはまだ決めていませんが、今こうして日本の大学に留学している事自体が人生で一番の挑戦かも知れません。

Q7　将来の目標は何ですか？（大学院)進学を希望していますか？ どんな分野の研究がしたいですか？ 就職は日本と中国どちらを考えていますか？ どんな仕事に興味がありますか？

A7　当面の目標は、もっと勉強したいので進学を考えています。研究分野はなかなか決められないけど…就職するなら日本で情報関連の仕事をしたいと思います。でも、今はそれより進学してからの研究分野のことを考えなくてはいけません(笑)。

Q8　留学前は南京大学の交響楽団でバイオリンを担当していたそうですが趣味は何ですか？ また日本で興味のあることはなんですか？ その他、どんなことでも結構です。

A8　趣味は音楽とかアニメとかゲームとかです。自分でもいかにも情報大の学生らしい趣味だと思いますが(笑)、でもなかなか話し相手が見つかりません。…あと情報大に「吹奏楽部」だけじゃなくて「弦楽部」のほうもあればいいな～と思っています。

史興君、インタビュー回答ありがとうございました。当面の目標に向かって進むと同時に、話し相手の友人を見つける努力もしてください。そして今後とも有意義な留学生生活を送ってください。応用情報技術者試験の合格おめでとう。

留学生の餅つき大会

国際交流・留学生支援事務室室長
今長　豊

平成22年12月26日(日)、冬休み期間中、日本の学生寮で過ごす外国人留学生の『餅つき大会』を実施しました。日中異文化研究サークルの日本人学生、教職員の支援を得て、総勢約五十名が参加しました。

毎年、年末年始の冬休みは、学生寮で生活する日本人学生の多くは実家に帰省します。そして、友人や家族とクリスマスや正月を過ごします。

文化や習慣の異なる日本で生活している外国人留学生にとってこの時期は、寂しさを感じると伴に、街の雰囲気から日本の文化を肌で感じる時期でもあります。

餅つきは日本の伝統的文化行事のひとつではありますが、最近、一般家庭では見なくなった光景でもあります。日本で年末年始を過ごす留学生に餅つきを体験してもらい、日本文化の一端に触れてもらいました。

前日に餅米を洗い、一晩水に浸して準備しておきました。

当日は餅つき会場の体育館入り口に、臼や杵を持ち込み、屋外に三つのかまどを設置しました。まずは、三つのかまどの薪による火おこしを体験してもらいました。

釜のお湯が沸き、蒸籠の餅米が蒸しあがるまでの時間を利用して、隣のかまどでは大鍋を使って豚汁を作りました。前日からの食材準備や、調理するまでの屋外作業などで苦労しましたが、寒い中でのあったかい豚汁はとても美味しく、僅か五分程度で大鍋が空っぽになりました。

餅は四臼搗きました。

留学生のほとんどはきね杵を持つのも初めてで、楽しく賑やかに餅つきを体験しました。

硬い餅米が蒸されて搗くことで柔らかな餅に変化して行く過程を、興味深く観察している学生もいました。

搗きたての餅は、大根おろし餅、きなこ餅、あんこ餅にして美味しく試食しました。

留学生にとっては、日本の伝統行事の一端を体験することができ留学生活の貴重な時間を過ごすことができました。

北海道情報大学大学院
経営情報学研究科経営情報学専攻(修士課程)学生の学会発表について

日本情報経営学会　第61回全国大会　(於：熊本学園大学)			
11月20日	見 年　丈 治	ビジネスプランプログラム	修士課程２年
	「ソーシャル・イノベーションの特徴に関する研究」		

情報処理学会　第73回全国大会　(於：東京工業大学 大岡山キャンパス)			
3月2日	石 井　拓 郎	メディア制作論プログラム	修士課程２年
	「プロジェクト型学習を支援するデジタルポートフォリオの構築と評価」		
3月3日	石 塚　貴 浩	システム設計プログラム	修士課程１年
	「組込みシステム向け教育用ドメイン特化型言語の開発」		
	杉 澤　愛 美	メディア制作論プログラム	修士課程１年
	「WebディレクターのためのPBL向けマルチメディアケース教材の評価と検討」		
3月4日	元 木　一 喜	メディア制作論プログラム	修士課程２年
	「学生プロジェクトによるｅラーニング教材制作モデルの提案と実践」		

北海道情報大学

学習支援センターの発足

学習支援センター長　穴田　有一

はじめに

日本リメディアル教育学会刊行の２００８年『リメディアル教育研究』では、第三巻第一号と第二号の二回にわたって学習支援センターの特集が組まれました。正確な統計はまだありませんが、そこに紹介された大学以外にも、学習支援センターまたはそれに相当する機関を設ける大学が増えています。本学でも、学習支援センターが設立され二年が経過しました。

学習支援センターの活動は授業時間外に行われますが、大きく二つに分かれます。一つは、補習授業や個別の補習指導などリメディアル教育を目的とするもので、入学前教育などを行う場合もあります。もう一つは、資格取得支援などのキャリア教育支援です。(日本リメディアル教育学会、第五回全国大会、２００９、シンポジウム)どちらの学習支援活動を行うかは大学の事情によって様々です。本学学習支援センターの活動は、これら二つを含みますが、学習意欲が高い学生への学習支援も行うことを特徴としています。

写真1　ピアサポートルームでの学習相談

ここでは、本学学習支援センターの活動をご紹介させていただきますが、紙数の都合から、活動のすべてを紹介することはできません。詳細については、学習支援センターのＷｅｂサイトをご覧ください。本学ＷｅｂサイトＷｅｂサイト(http://www.do-johodai.ac.jp)のトップページからご覧いただけます。

ピアサポートと学習支援

昨年12月、東京国際交流館で学習支援機構主催のシンポジウム『ピアサポートのダイナミズムとインパクト～学生が創造するキャンパス空間～』が開催されました。ピアサポートとは、学生生活上の学生同士の支援活動ですが、その中の主要な活動の一つに学生同士の学習支援活動があります。

本学では、四年生と大学院生のスタッフからなる学習チュータが、学習支援活動を行っています。主要な活動はピアサポートルームでの学習相談(写真1)と、科目担当教員と協力して行う授業時間外の補習学習です。ピアサポートルームでは、各科目の学習相談の他に、学生生活上の相談にも学生目線で応じています。

学習チュータによる学習支援活動は、図1の三層モデルにもとづいて行われています。授業でわからない箇所を自覚できる学生層Ｂはピアサポートルーム、自力で授業についていくのが難しい学生層Ｃは補習学習の対象となります。なお、学生層Ａは学習相談や補習学習の必要はなく、近年、日本の大学でも試みられているラーニングコモンズや、以下で述べる学内コンテストおよびＪゼミの対象としてふさわしいと考えられます。ピアサポートルームの利用者はこの二年間増加していますが(図2)、まだ利用度が低いのが実情です。同じ大学の上級生とはいえ、知らない人に相談するのを躊躇する学生が多く、今後の課題の一つです。

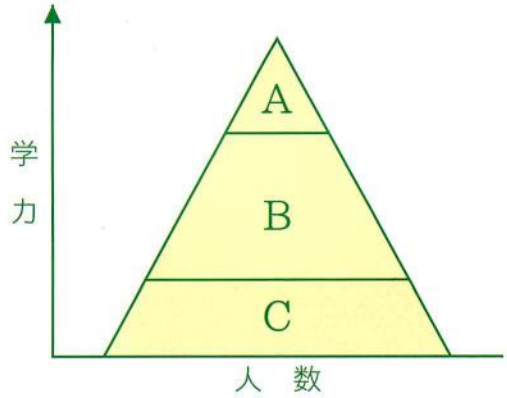


図1　学習支援対象の三層モデル

自主的学習支援

本学に特徴的な自主的学習支援活動として、各種学内コンテストが行われています(表1)。学習支援センターでは、担当事務局がないコンテストについて、予算と受賞盾、賞状、賞金の

Ｗｅｂデザイン・コンテスト
プログラミング・コンテスト
ビジネスプレゼンテーション・コンテスト
英語プレゼンテーション・コンテスト
ハラスメント防止に関するポスターコンテスト
北海道情報大学図書館賞
日本語弁論コンテスト
ＣＭコンテスト

表1　2010年度の各種学内コンテスト

準備などを支援しています。

また昨年度後期から、空き教室を利用した自習室を試行しています。利用者へのアンケートから、図書館とは異なる自習スペースに対して、一定のニーズがあることが明らかになりました。

この他に、学習へのモチベーションを高める目的で行われている自主ゼミ（Ｊゼミ）担当教員に対して、ゼミ資料準備のためのコピーカードを配布し、この学習活動を支援しています。

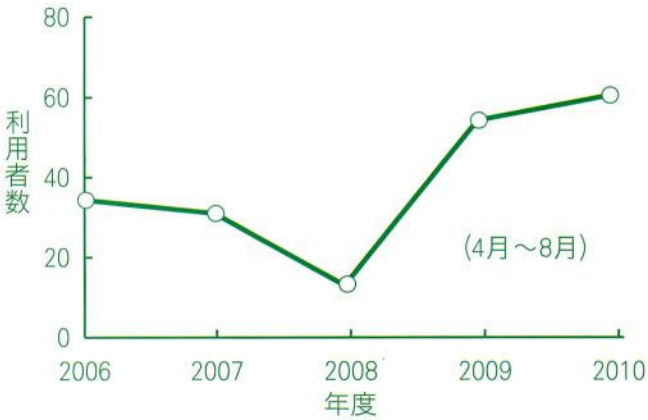


図2　ピアサポートルーム利用者数

資格取得支援

資格取得は本学の主たる教育目標ではありませんが、この支援のねらいは、資格取得を目標とすることで学習へのモチベーションを誘発するとともに、目に見える形で成果を確認し自信を持ってもらうことです。具体的には、基本情報技術者試験（独立行政法人情報処理推進機構、ＩＰＡ）のための対策講座、資格取得ガイドブックの発行、各種資格取得受験料補助などを行っています。これらの制度は、林雄二経営情報学部長のご尽力によるところが大きく、基本情報技術者試験・午前試験免除対策講座の修了者数が、昨年度の０に対して今年度は十二人になるなど徐々に成果が表れています。

一方、資格取得が将来のキャリアと密接に結び付くという特徴がある経営情報学部医療情報学科については、資格チュータによる支援活動を行っています。

資格取得支援に関する情報は、学習支援センターＷｅｂサイトや学生ポータルサイトから随時学生に提供されていますが、その他に、学習支援センター発足と同時に整備された学内廊下の掲示版でも提供されています（写真２）。掲示板では、上述のピアサポートルームや自習室、コンテストなどの情報提供も行われています。

おわりに

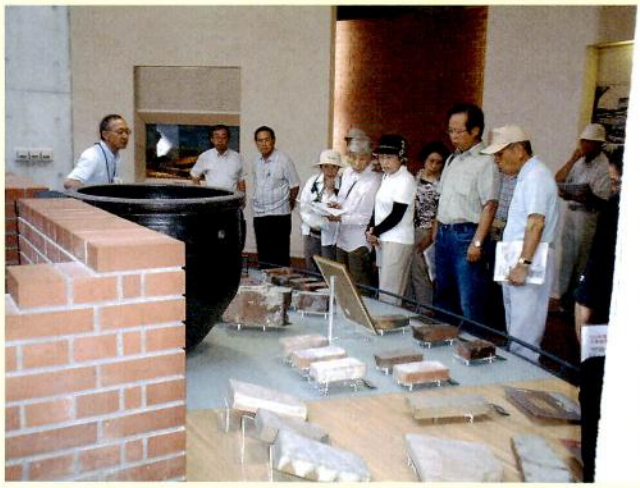
学習支援センターは、進学率五〇％時代の落し子といえるかもしれません。中世ヨーロッパで始まった大学という教育システムは、政治、経済、産業構造の変遷とともに、国ごとに様々な発展を遂げてきました。その中でも、ドイツが近代国家に成長するうえで大きな役割を果たした所謂フンボルト理念に基づく大学モデルは、日本だけでなく世界中の大学に大きな影響を与えました。しかし、エリート学生を対象とした二百年前の大学モデルには変容が求められています。私たちが毎日接している学生と素直に向いあい、彼らに何が必要なのかその本質を考えることから出発して、自立した社会人として育て上げるのが今日の大学教員の役割の大きな一部分であると思います。

発足して二年を経た学習支援センターの活動を支えているのは、学習支援センター運営委員はもとより、学習支援センター担当職員の学生へのきめ細かな対応です。教職員の皆様のご支援とご協力を得ながら、学生とともに成長してもらいたいと思います。

写真２　学習支援センターの学内掲示板

公開講座終了報告

参加人数		備　考
一般	24	
一般	19	
一般	40	
一般	15	
一般	27	
一般	17	
一般	8	
一般	39	
一般	31	
一般	11	
一般	19	
一般	29	
一般	29	
小学3～6年生	8	
小学生とその保護者	36	親子15組参加
一般	15	
一般	27	
一般	9	
一般	11	
一般	38	
一般	24	
一般	29	
一般	14	
一般	17	
	536	



8月28日（土）
「地域学講座ふるさと江別の歴史と文化・再発見」
現地学習の様子

7月1日（木）
「Word初級編」の様子

8月14日（土）
「夏休み自由研究教室
～ロボットで理科を学ぼう～」の様子

5月29日（土）
「人間関係が良くなる教育カウンセリング1日体験講座
～構成的グループエンカウンター入門（春期）」の様子

平成22年度 北海道情報大学

平成22年度北海道情報大学公開講座にご参加いただき、まことにありがたく、厚く御礼申しあげます。

おかげをもちまして、全24講座にたくさんのご参加をいただき、無事終了することができましたことをご報告させていただきます。

今後とも北海道情報大学の社会活動にご理解とご支援を賜りますようお願い申しあげます。

No.	講　座　名	回数	参加費
1	英語やり直し塾ー発音・文法・会話からオバマ大統領のスピーチ音読までー	3	1,000円
2	コンピュータはどこまで進化したか	1	500円
3	パソコン入門	4	1,000円
4	ベンチャービジネスを学ぼう	5	1,000円
5	食と健康シリーズ（さっぽろバイオクラスター(Bio-S)・本学合同公開講座)	5	1,000円
6	３次元コンピュータグラフィックス入門	3	1,000円
7	人間関係が良くなる教育カウンセリング１日体験講座～構成的グループエンカウンター入門(春期)	1	1,000円
8	Word初級編	5	1,000円
9	初めてのデジタルカメラ	2	1,000円
10	人間関係が良くなる教育カウンセリング１日体験講座～構成的グループエンカウンター入門(夏期)	1	1,000円
11	ネット社会閑話	4	1,000円
12	フォトショップ初級編	4	1,000円
13	パソコンで季節のグリーティングカードを作りましょう！	4	1,000円
14	こどもビデオ編集体験講座	2	無料
15	夏休み自由研究教室～ロボットで理科を学ぼう～	1	無料
16	現代青少年のコミュニケーションの問題性とその対処法～教育カウンセリングを手がかりに	4	1,000円
17	地域学講座「ふるさと江別の歴史と文化・再発見」	4	1,000円
18	手軽に作るクレイアニメ	4	1,000円
19	多読で楽しむ英語	3	1,000円
20	Word中級編	4	1,000円
21	マーケティングを学ぼう	5	1,000円
22	レベルアップ！フォトショップ中級編	4	1,000円
23	JavaScriptを用いた初級プログラミング	3	1,000円
24	フォトショップ上級編(デジタル一眼レフカメラ)	2	1,000円
	合　計	78	

11月18日(木)
「レベルアップ！フォトショップ中級編」の様子

10月19日(火)
「食と健康シリーズ(さっぽろバイオクラスター(Bio-S)本学合同公開講座)」の様子

情報メディア学部 情報メディア学科 松井ゼミ

松井ゼミは、２００９年度から始まった新しいゼミです。やっと２０１１年の３月に卒業生がでました。さて私は数学関係が担当（専門は非線形偏微分方程式）です。ですから、数学に関連したテーマを学生が選んでくれると、ゼミを進めやすいのですが、基本は学生さん達が「知りたいことを学ぶ」ゼミです。今まで学生さん達が選んだテーマを幾つか紹介すると、「折り紙の数理」、「数の歴史」、「プログラムの数学」、「暗号」、「数学の不可能問題」、「黄金比」、「Bernoulliの法則」、「線形代数」など様々です。

ゼミの進め方を紹介しましょう。三年と四年の合同でゼミを行っていますから、ゼミ生は毎週二コマ連続でゼミに参加しています。三年生は幾つかのグループに分かれ、各グループで「知りたい事」の本の内容を毎回発表しています。そのとき質問（主に松井から）が出ますから、それに答えなくてはいけない、という形式をとっています。当然答えには「分かりません」も含まれています。四年生は全員異なるテーマ選ぶことにしています。形式は三年生と同じです。

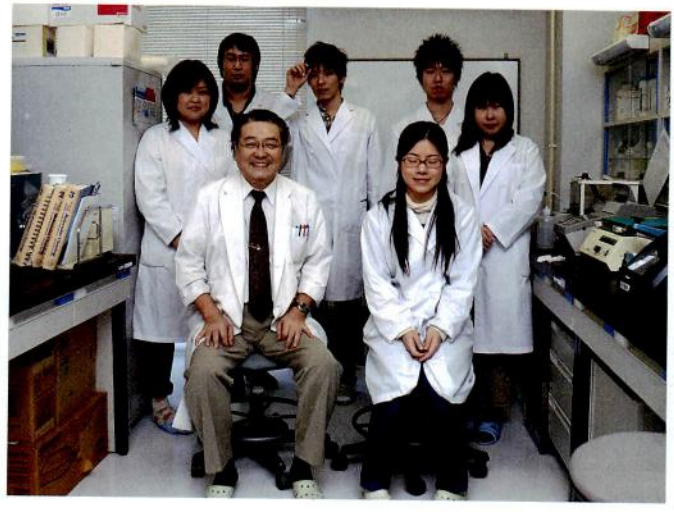
数学で語れることテーマにしていますが、全ての事を私が知っているわけでありません。ですから、教員も一緒に「新しいこと」を学びたいと思ってゼミを担当しています。これから松井ゼミに参加する方は、先生に教えてやろう、という気持ちで参加してくれると面白いゼミが出来ると思います。

経営情報学部 医療情報学科 中林ゼミ

研究室には優雅に（？）熱帯魚が泳ぎ、「遺伝子だ、ＤＮＡだ」と、情報大では余り聞き慣れない言葉が飛び交っているゼミが有ります。

「中林ゼミ」では、細胞培養や遺伝子解析などのバイオ研究・実習を通じて「健康」や「疾病」に関与する遺伝子の研究をしています。

医学を含む生命科学の分野では膨大な量の情報が蓄積されています。これらの情報の中から必要な情報を取り出し、解析するのが「中林ゼミ」の大きなテーマです。例えば、自分の遺伝子を調べて「メタボになりやすい」「ガンにかかりやすい」といった体質を知りたく有りませんか？　ヒトは約二万数千種類の遺伝子を持っていますが、その中から「肥満」、「高血圧」、「脂質代謝異常」、「血糖異常」、「ガン」などの生活習慣病に関与する遺伝子が多数見付かっています。これらの遺伝子を調べる事により、生活習慣病などの発症リスクが分かれば、生活習慣を個々の体質に合わせて改善する等、個人に合わせたオーダーメード医療や予防医療が可能になります。



「中林ゼミ」はまだ若く、２００９年度に最初の卒業生六名が、10年度には五名が卒業します。新四年生九名と三年生を加え、厳しい（!?）指導のもと研究に日夜励んでいます。

研究を通して世の中に氾濫する情報の中から、何が正しいか判断できる洞察力を磨く事が最大の目的です。今後は記憶力・スポーツ・ガンに関する遺伝子など興味深い分野の研究に挑戦したいと考えています。

We Are EizoClub!!

映像倶楽部

わたしたち映像倶楽部の活動内容としては主に蒼天祭やＣＭコンテストなどに向けた映像作品の制作や、撮影技術向上のための作品制作です。
映像作品といっても、段階は多々あります。どのような作品を作るのか、そのイメージや構成などを紙上等にまとめ、概ね決まってきたらそれに向けたシナリオや絵コンテ制作をし、会議の結果、撮影に入ります。そして編集作業を経て、一つの作品になります。これらすべてを一人でこなすのは大変ですから、それぞれ役割分担も決めなければなりません。監督、役者、(ビデオ)カメラ、シナリオ、記録、ＡＤなどなど。映像作品１つ作るのにあたって多くの人手＆手間がかかります。一見難しそうな作業で、できるのか不安な方も多くいると思います。しかし、ここ映像倶楽部では最初からそういった作品を作ったことのある技術者はほとんどいません。映像初心者も多々いるのです。そういう人でも大丈夫。先輩方が優しく、的確に指導してくれます。

また、部員同士先輩後輩問わず、皆がアットホームで仲良しです。週１回行われる会議でも、皆積極的に、かつ楽しそうに意見交換するようすが見られます。
映像作品を皆で協力して作りたい！役者をやってみたい！シナリオを描いてみたい！在学中になにか作品をつくりたい！などなど、そういった人々が集まった映像倶楽部。映像に興味がある人、そうでない人でも、一度部室に見学に来てみてはいかがですか？

部長
稲毛敏秀

連絡先
iookw.north_star@ezweb.ne.jp

Webデザインコンテスト 10年の歩み

Webデザインコンテスト実行グループ
穴田 有一

発端

２００１年４月、情報メディア学部情報メディア学科が新設され、第一期期生が入学しました。学生の同好会や部活動はあるものの、授業以外で学生が学習活動する雰囲気がほとんどなかった当時、学生に知的活力を自主的に生み出すきっかけを与えたいという一部の教員の思いから、この年、ホームページ制作のコンテストが始まりました。コンテストを主催したのは、筆者と廣奥暢准教授の呼びかけに賛同してくださった教員有志の集まり、ホームページコンテスト実行グループ（HPCGroup）でした（表１）。

第一回コンテスト

入学式前のポスター貼り（図１）や募集要項、配布プリントの印刷、そして応募作品の受付、審査、さらには表彰式の受賞盾の発注など、すべてHPCGroupメンバーのボランティアで行われました。資金は、当時の大野公男学長、久野光朗経営情報学部長、宇都宮芳明情報メディア学部長、そしてHPCGroupメンバーからの寄付でした。

こうして行われた第一回コンテストですが、集まった作品はわずか七点。しかし、最優秀賞に選ばれたシステム情報学科三年、藤井敏史教授ゼミの遠藤嘉春、柴田雅之両君の作品『図書館へZoom In !』は、当時としてはまだ珍しかった三百六十度見渡せる写真（CubicVR）を使い、本学の図書館内部をバーチャルに体験できるすぐれた作品でした。実は、他の六点はすべてシステム情報学科、高井那美（准教授）ゼミの学生が応募したものでした。つまり、第一回ホームページコンテストは、結果的に藤井ゼミと高井ゼミのコンテストだったのです。

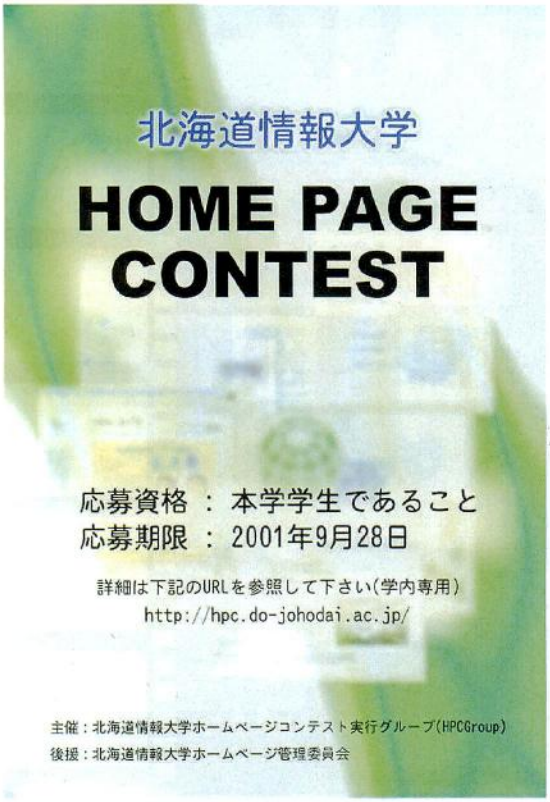


図1　第1回コンテスト作品募集ポスター

この結果から、私たちは多くのことを学びました。多くの学生が自主的に参加するのが理想ですが、最初からそれを実現するのは難しいのです。当面は、コンテストを量的に盛り上げることに徹し、ある程度の規模に成長すれば自主的な参加も増え、作品の質も向上すると考えられます。物質の世界では、分子のゆらぎで生成した核がある程度の大きさを超えたとき、結晶の成長が加速します。

このときの表彰式は学長室で行われましたが、第二回表彰式からは、学生の目に触れる場所を求めて蒼天祭、学生プラザへと移っていきます。

第二回以降のコンテスト

第二回コンテスト以降、一方では学生の声を拾い、他方では各ゼミに働きかけ、とにかく応募作品数を増やすことが当面の目的でした。また、募集対象を通信教育部にも広げました。こうして、応募作品が次第に増えていきます。（図２）。当然作品

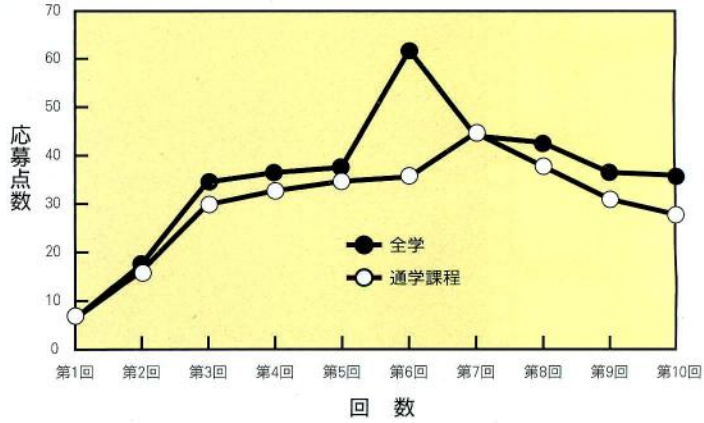


図2　応募作品数の推移

表１　Webデザイン（ホームページ）コンテスト実行グループの歴代メンバー

2001年度：若林 久二（故人）、冨士 隆、広奥 暢、サイモン・ソーラ、伊藤 公紀（転出）、穴田 有一
2002年度：若林 久二（故人）、冨士 隆、広奥 暢、野澤 譲治（故人）、サイモン・ソーラ、穴田 有一
2003年度：若林 久二（故人）、冨士 隆、広奥 暢、野澤 譲治（故人）、谷川 健、サイモン・ソーラ、穴田 有一
2004年度：広奥 暢、野澤 譲治（故人）、谷川 健、サイモン・ソーラ、斉藤 一、金 義鎮（転出）、穴田 有一
2005年度：広奥 暢、野澤 譲治（故人）、谷川 健、サイモン・ソーラ、斉藤 一、金 義鎮（転出）、穴田 有一
2006年度：広奥 暢、隼田 尚彦、谷川 健、サイモン・ソーラ、斉藤 一、穴田 有一
2007年度：広奥 暢、隼田 尚彦、谷川 健、サイモン・ソーラ、斉藤 一、穴田 有一
2008年度：安田 光孝、広奥 暢、隼田 尚彦、谷川 健、サイモン・ソーラ、斉藤 一、穴田 有一
2009年度：安田 光孝、広奥 暢、隼田 尚彦、谷川 健、サイモン・ソーラ、斉藤 一、穴田 有一
2010年度：安田 光孝、広奥 暢、隼田 尚彦、谷川 健、サイモン・ソーラ、斉藤 一、川上 正博、穴田 有一

の質は玉石混淆です。この事態を受けてメンバーの間では作品の質を問う議論が起こりましたが、筆者は、様々なレベルの参加者がいる多様性の中から優れた作品が生まれるのではないかと考えています。

第二回は、全教員に寄付を呼びかけ二十四名の先生からいただいた寄付で実施しました。第三回以降は、久野光朗学長（当時）と中居常務理事のご尽力により、活動資金は大学から支援していただくことになりました。盾と賞金の準備は会計課が担当してくださることになり、その後は、学生サポートセンター、そして学習支援センターに移りました。

ホームページコンテスト（ＨＰＣ）の名称は、第四回からＷｅｂデザインコンテスト（ＷＤＣ）、実行グループはWDCGroupに変わり現在に至っています。

今後

コンテストの他に、２００３年度には、蒼天祭で「ホームページ工房」も試みました。当時はまだ普及の途上にあったホームページ制作の一般市民への普及と、蒼天祭の活性化に多少なりとも貢献できないかという意図からでした。

一方では、作品募集と審査の効率化にも取り組みました。２００６年度に学内共同研究として構築したコンテストサーバーを２００７年度から運用しています。このシステムは、単に応募作品の登録や審査を容易にするだけでなく、応募段階で作品のエラーをチェックし、応募者がそれを修正したうえで最終作品を登録するというｅラーニング機能も備えています。これは、Ｗｅｂデザインコンテストが学習と密接にかかわったものであるという当初の趣旨を体現したものの一つです。この研究は斉藤一准教授ゼミを中心に取り組み、情報処理学会で成果を発表しています。

２００３年度以降、他の学内コンテストも企画されるようになりました。ビジネスプレゼンテーションコンテスト、プログラミングコンテストなどが年を追って開催され、授業時間以外で、学生の学習へのモチベーションを高める機会が増えてきました。

２００８年度には、本学と国際交流協定覚書を締結したタイ王国・ラジャマンガラ工科大学タンヤブリ校（RMUTT）との国際コンテストも実施されました。２００９年度には、ラオス国立大学（NUOL）も参加し、今日に至っています。

Ｗｅｂデザインコンテストは十年を経ました。実施方法についての話し合いや夜遅くまでかかる作品審査などメンバーの苦労は多いのですが、学生に知的活力を与えたいという思いから続けてきました。また、コンテスト立ち上げの時期から今日まで、様々な形で応援してくださった教職員の皆様のご協力があって続けてこられたのだと思います。あらためて皆様のご協力に感謝します。

第一回コンテスト以来、作品募集要項の冒頭には、このコンテストの趣旨が書かれています。最後にそれを引用します。「本学学生の学習活動の一環として、Ｗｅｂページ（ホームページ）を制作する過程でコンピュータ技術とコンテンツ制作能力・表現力を磨くとともに、自主的な創作活動を体験する。」

第5回 プログラミングコンテスト結果報告

システム情報学科
齋藤 健司

今年で第五回となるプログラミングコンテストですが、応募件数が初めて二十件を越え二十四作品が集りました。

一次審査の結果十名がプレゼンテーション(二次審査)に進むこととなり、２０１０年12月15、16日の二日に分けてプレゼンテーションを実施しました。その結果をふまえ最終審査を行い四名の受賞者を選出し、２０１１年１月19日に学生プラザにて表彰式を行いました。

プログラミングコンテストは提出できる作品を作り上げることがなかなか困難なコンテストだと思います。応募してくれた参加者に賛辞を呈したいと思います。しかしながら、システム情報学科からの応募が多数で、偏りがありました。毎年同じ問題があり、なかなか解決できていませんが、次回は様々なご意見を伺い、他学部・学科からも参加しやすいような工夫をしていきたいと思います。

本コンテストで応募している作品はプログラミング言語を指定していませんが、例年どおりJavaによるプログラムが多数でした。しかし受賞作品にはObjective-C、Visual Basic、C#の作品が含まれており、他にもPHP、C言語、JavaScriptの作品がありました。

受賞作品について簡単に紹介すると、優秀賞(一般部門)：服部 裕樹君の「TextAndNote」という作品は、昨年発売され話題を呼んだiPadで動作するアプリケーションで、テキストを読みながらノートが取ることができる物です。奨励賞：荒木 俊介君の「Easy Create 3D Map」は、３ＤＣＧを題材とした作品で、既存の３Ｄモデルを読み込み、これを３Ｄ空間に配置して保存することのできるアプリケーションです。奨励賞：石崎 良多君の「Miniature Games」は、囲碁、オセロ、チェスの三種類のゲームが遊べる物で、設計などの部分に努力の跡が見られる作品でした。奨励賞：小林 理君の「自作画像変色ツール」は数少ない情報メディア学部からの応募作品で、カラーバランスを変更したり、平滑化(ぼかし)、鮮鋭化など様々な画像処理が可能なプログラムです。

詳しくは<http://procon.do-johodai.ac.jp/>のサイトにて公開していますので是非参照してみて下さい。

今年度は最高の賞である最優秀賞を、該当者無しとしました。また今年新設したJava Web Start部門の優秀賞も該当者無しとしました。応募件数が多かっただけに非常に残念ですが、昨年度までの受賞作品のレベルから止むを得ないと判断しました。

前述のウエブページにて、作品へのコメントや過去の作品も参照できるので、参考にしてもらい次年度のコンテストでの奮起を期待したいと思います

受賞者

＊最優秀賞
- 該当者なし

＊優秀賞(一般部門)
- 0712077：服部 裕樹「TextAndNote」

＊優秀賞(Java Web Start部門)
- 該当者なし

＊奨励賞
- 0712065：荒木 俊介「Easy Create 3D Map」
- 0812067：石崎 良多「Miniature Games」
- 0823618：小林 理　「自作画像変色ツール」

第8回 北海道情報大学囲碁大会の報告

梅津　真

昨年（２０１０年）12月２日と９日の両日、第八回学内囲碁大会が開かれました。年末の忙しい時期ということで、教職員の参加者は例年に比べて少なめでしたが、囲碁部前顧問の石井勝先生がわざわざ小樽から駆けつけて下さった他、中国人留学生の朱君も参加して、日中交流も兼ねた熱い戦いが繰り広げられました。今回は、最近メキメキ力をつけて来た杉山慧太君（先端経営学科二年）が全勝で優勝を飾りました。恩師の石井先生から優勝カップを手渡されて、とても嬉しそうにしていました。優勝カップが教職員から学生の手に渡ったのは久しぶりのことです。このたびの杉山君の優勝が、学生の黄金時代の到来を告げるものとなるのかどうか、次の大会が注目されることになりそうです。

●「ブックハンティング2010」
～本屋さんに行って、図書館に備える本を自分で選ぼう！～

２年目を迎えた学生選書企画「ブックハンティング」。2010年度は７月と11月に実施し、延べ30人と、昨年度の２倍の学生が参加しました。紀伊國屋書店の札幌本店にて選書を行い、合計で523冊の本が学生の視点によって選書されました。次年度も実施しますので、是非「ブックハンティング2011」に参加して、自分で選んだ本が図書館の書架に並ぶ嬉しさを体感してください。

●ICコンビタグ貼付・データ紐付け作業完了！

北海道情報大学図書館は、本年３月に新築されるｅＤＣタワーに新しく生まれ変わります。新図書館は、北海道内図書館では最初となる10万５千冊収蔵可能な自動書庫を設置し、自動貸出返却装置や蔵書点検装置など最新の機器類を整備しています。

これらの装置を効率良く機能連携させるため、住友３Ｍ社のＩＣコンビタグを全蔵書に貼付し、個々の図書データとリンクさせる作業を昨年７月から本学学生を多数動員して進めてまいりました。この程、約11万冊の蔵書の貼付・データ紐付け作業が完了し、本学図書館資料のトレーサビリティーが確保されました。これにより、資料管理の効率化が飛躍的に向上し、資料の提供サービスが迅速化されます。新しい機能の図書館にご期待ください。

●平成22年度文献検索講習会の開催

みなさんは課題レポートや卒業論文を書く際に、必要な資料をどのように入手していますか？

図書館では、レポート作成時に必要な資料を効率的に入手するための文献検索講習会を実施しています。平成22年度はゼミ単位の受講で延べ150名の皆さんにご参加頂きました。

図書館のＨＰから検索できる主なデータベースには、「ジャパンナレッジクラシック」「雑誌記事索引」「CiNii(サイニィ)」「医中誌Ｗｅｂ」等があります。

受講者のみなさんには、実習形式で検索を体験していただき、やってみると案外難しくない事が実感していただけたと思います。

図書館では今後も、みなさんのご要望に沿った企画や講習会を随時実施していきたいと思います。是非ご参加ください。

私の薦める1冊の本

このコーナーでは、日頃の勉学や大学生活を豊かにするため、図書館で読みたい本や読むべき本を発見する手助けとして、本学の教員等による推薦図書をご紹介しています。ブックガイドとしてお役立て下さい。

『イリアム(上)(下)』、『オリュンポス(1)(2)(3)』
ダン・シモンズ著、酒井昭伸訳
早川書房　2010　ハヤカワ文庫
配架場所:文庫・新書　<請求記号　933.7||SIM>

©早川書房

文=角井　穆(かくい　あつし)
(経営情報学部教授)

人はなぜ生きるのか・人生の目的と価値は何か、という問題に直面した人には、本書が役に立つでしょう。

本書は、「イリアム」が上下二巻、「オリュンポス」が三分冊、合計で2,985ページです。読むのに一月か二月はかかるでしょう。しかし、この長い物語によって、登場人物のうち特にトーマス・ホッケンベリーとディーマンとハンナの三人が精神的に成長していく過程が良くわかります。そして、ついには、人はなぜ生きるのか・人生の目的と価値は何か、という問題に答えることができて、充実した人生を送るようになるのです。

2,985ページも物語る必要があるのは、人が問題を解決するのに苦労するからです。簡単に解決することができないので、いろいろな経験をして、遠回りをしなければならないわけです。その間は、問題に答えられずに苦悩するのですが、そうした人の定めをじっくりと経験できるのが小説を読むことの意義であり、2,985ページを読みきることの価値であります。

本書に出てくる未来のコンピュータや量子技術やバイオテクノロジーは、ダン・シモンズが優れた人であるため、興味深く学習できる水準にあります。決していいかげんな作り話ではありません。

ダン・シモンズについてはネットで調べると詳しいことがわかります。

私としては、本書に登場するロボットが好きになりました。それから、登場人物のアキレスが、その後どうなったのかが気になり、いろいろと想像しています。こうしたことも、小説を読む楽しみであり、人生を充実させてくれます。

『ボルヒェルト全集』
ヴォルフガング・ボルヒェルト著　小松太郎訳
早川書房　1973
(参考文献『ヴォルフガング・ボルヒェルト　その生涯と作品』加納邦光著　鳥影社　2006)
配架場所:開架書架　<948||BOR>

©鳥影社
©早川書房

文=加納　邦光(かのう　くにみつ)
(経営情報学部特任教授)

ヴォルフガング・ボルヒェルトは1921年5月に生まれ、47年11月に26歳の若さで亡くなっている。その短い生涯は、ほとんど戦争と牢獄、そして病気であった。零下40度にもなる厳しい寒さのロシア戦線では、戦闘による負傷や武器携帯も許されなかった伝令任務があった。また兵役拒否の嫌疑による銃殺の求刑や空襲下でも地下室への避難を許されなかった投獄生活、そして凍傷、黄疸、ジフテリア、発疹チブス、肝臓障害などによる病床生活であった。ようやく自由の身となった戦後2年あまりの間に、彼は熱を出しながら、現存する作品を書いた。彼の代表作は『戸口の外』や『タンポポ』などであるが、『パン』、『台所時計』、『ねずみだって、夜には寝る』、『三人の暗い王』などの優れた短編小説も残している。ここでは『台所時計』を紹介することにする。

ベンチで日向ぼっこをしている人たちのところに、少し老けた顔をした一人の若者が、何の変哲もない壊れた時計を持ってやって来る。この時計は彼の家の台所にかかっていた時計だが、若者はこの時計が丁度2時半で止まっているところが面白いのだと言う。その2時半という時刻は、夜の2時半で、若者がだいたいいつも帰宅する時間であった。するとどんなにそっとドアを開けても母親が気づいて、彼に食事を用意してくれるのだった。若者にはそれが当たり前のことであり、また母の本能的な愛情を煩わしいとも思っていた。しかしある晩、爆弾が彼の家に落ち、この2時半を指している時計以外のすべてがなくなってしまった。その時はじめて、若者はあの母親が自分に食事を用意してくれた時間が、貴重な「楽園」の時間であったということに思い至るのである。

ボルヒェルトは他の作品でも戦中や戦後すぐの時代という過酷で厳しい窮乏の最中にあっても、それにうち負かされない生命と愛の貴さや豊かさを描いている。現代は物質的に豊かな時代であるが、迷いと混迷を深めているとも言える。それだけにこの作者とその作品から現代を生きていく力と人々の心をつなぐ手がかりを見いだしていただきたい、と願っている。

私の薦める1冊の本

『Longman Dictionary of Contemporary English (5th Edition)』
(ロングマン現代英英辞典[5訂版])
ピアソン・エデュケーション発行　桐原書店(発売) 2008
配架場所:参考図書<請求記号　833||R66>

©ピアソン・エデュケーション

文=田中　洋也(たなか　ひろや)
(医療情報学科准教授)

ロングマン現代英英辞典5訂版(Longman Dictionary of Contemporary English, 5th Edition, 以下,LDOCE 5)は，3億9千万語のLongman Corpus Networkに基づき，英語学習者に必要な情報を網羅している学習者辞書です。外国語として英語を学ぶ場合，単一言語辞書(monolingual dictionary)は，敷居が高く感じる人もいるかもしれませんが,LDOCE5を薦めるには，3つの理由があります。

(1) 語の定義がもっとも基本的な2,000語で書かれており，理解しやすい。
(2) 多義語の定義が書かれている順序が頻度順であること，基本的な語にCommunication 3000の見出しを付けていること等，「必要な順に」学習できるように配慮されている。
(3) 付属のDVDにより，コンピュータ(Win/Mac)上でデータを参照し，学習できる。

語彙学習の数の課題に対して,LDOCE 5では，話し言葉(S)，書き言葉(W)別になっている高頻度3,000語とは別に，話し言葉，書き言葉の両方にわたって高頻度であるCommunication 3000の見出しを提供しています。Longman Corpus Networkから編成されたCommunication 3000 は，話し言葉，書き言葉全体の86%を占めるとされています。さらに，研究，学問的な課題の遂行に必要とされるAcademic Word List として570語が設定されています。学習者は，これらの指標を手がかりに言語運用の基礎基本となる語彙の学習が出来ます。

LDOCE 5は，語彙学習の質の課題に対しても配慮がなされています。一つの語をとっても，その知識の側面は複雑で多様なものです。LDOCE5では，語の見つけ方に始まり，文法を調べる，語彙を構築する段階に進むと，文法上の働き，その語と他の語との関係性についても参照，学習すべき項目として提示しています。これは，一つの語の知識が，その一語で独立的に存在するものではなく，他の語との関係の中で存在し，その関係性の習得も含むものであることを示しています。

外国語学習は，語彙学習に代表されるように終わりのない学習です。LDOCE 5のカバーには，For Advanced Learners (上級学習者向け) の表示がありますが，実際には高校生レベルの語彙力で使いこなすことができる辞書です。Advanced Learnerになるための辞書・参考書として是非，活用してください。

どうしてもLDOCE5に踏み切れない場合は,LDOCE 4を基にした,「ロングマン英和辞典」(ピアソン桐原) を橋渡しとして利用されるのも良いかもしれません。

『ミラーニューロンの発見』
－「物まね細胞」が明かす驚きの脳科学－
「Mirroring People: The New Science of How We Connect with Others」
マルコ・イアコボーニ著、塩原通緒訳
早川書房　2009　ハヤカワ新書
配架場所:開架書架 <請求記号　491.371||IAC>

©早川書房

文=林　雄二(はやし　ゆうじ)
(経営情報学部教授)

コンピュータ科学との関連から、私は脳科学に少々関心を持っていますが、この本には特別なニューロン(神経細胞)にまつわる興味深い話が盛りこまれていました。

パルマ大学のジャコモ・リゾラッティらは、猿の動作に伴う神経の反応を調べているときに、じっとしている猿の運動神経の一部が、人間の動作に即座に反応することを偶然に発見してしまいます(1996年)。このミラーニューロンが、人間の様々な心の動きを解き明かすきっかけになっていくことが、本書を読むとよく理解することができます。

我々は、人の笑顔に接すると自分も無意識に笑顔になっています。人の苦痛を目にすると自分の苦痛のように感じます。人が涙すると自分も涙が出そうになります。人間感情のこのような特性はミラーニューロンがあってのものといえるようです。

友達が多く社会的能力がある子供は、ミラーニューロンが活性化されているとの調査があり、コミュニケーションにはミラーニューロンの役割が大きいと、著者は述べています。教育者としては、いかにコミュニケーション能力を伸ばす教育を行うか、ということのヒントとして受け止めることができそうです。

ミラーニューロンの発見は、生物学におけるDNAの発見と同様のことを心理学の分野になすだろうと断言した神経科学者がいます。人間の心の働きを、心理学、哲学ではなく、脳科学から説明することに繋がる心強い視座が得られつつあると考えることができるのではないでしょうか。人間の意志はミラーニューロンが駆動しているかも知れないといったら、過激過ぎるでしょうか。思いは広がります。

ひょっとしたら、恋愛を成就させるヒントも、ミラーニューロンにあるかもしれませんよ(本文pp.143～145)。

私の薦める1冊の本

『榎本武揚シベリア日記』
榎本武揚　著　講談社　編
講談社　2008　講談社学術文庫
『現代語訳　榎本武揚シベリア日記』
榎本武揚　著　諏訪部　揚子、中村喜和　編注
平凡社　2010　平凡社ライブラリー
配架場所：開架書架　＜請求記号　292.91||ENO＞

©講談社　©平凡社

文＝原　暉之（はら　てるゆき）
（経営情報学部教授）

榎本武揚は、幕末の動乱と戊辰戦争の終幕となった箱館戦争のとき五稜郭に立てこもり、新政府軍に最後まで抵抗した敗軍の将として名高い。明治政府の要職にも就いたことで二君に仕えたうえ出世までした、と批判もうけたが、西洋文明に通じたテクノクラート（高級技術官僚）として、幕末期と明治期を問わず日本の近代に大きな足跡を残した。殖産興業の第一線で世界レベルの仕事をしたエンジニアとの評価も高い。さらにいえば、国際法の知識と地政学的な感覚が抜群の外交官としても重要な役割を演じた人物であった。榎本がそのような資質を最もよく発揮した場面は、初代駐露公使として在勤したサンクトペテルブルグでの樺太千島交換条約締結交渉だったように思う。官僚として優れていたが、それだけではなかった。現に明治一一年（一八七八年）ロシアの首都から帰国するに際し、並みの官僚なら誰でも敬遠するような四五日間シベリア横断馬車の旅を選び、しかも凸凹道をひた走る大揺れの車中で、あるいは南京虫と藪蚊に悩まされる宿で、毎日克明な現地観察記録を書き残した点に榎本の面目躍如たるものがあった。ここに紹介する一冊は、その日記を活字にしたものである。ただし榎本は生前あえてこれを世に問うことを好まなかった。日記の存在が明らかになるのは没後一六年を経た関東大震災のときで、崩壊した住居の中から偶然発見されたという。第二次大戦前と戦中に三度も公刊されたが、非売品だったりしてあまり人目につかなかった。ようやく今から三年前、没後一〇〇年を記念して講談社学術文庫に収録された。さらに昨年、現代語訳が平凡社ライブラリーの一冊となった。後者は周到な注釈もついているので、学生の皆さんにはこちらをお奨めしたい。世界の現勢から学ぶとは、近隣諸国を理解するとは、どういうことか、そんなことを随所で考えさせられるが、とりわけ皆さんには、知的好奇心に基づく事物の観察とは何か、ということを読み取ってほしいと思う。

『ロビンソン・クルーソー（上）』
ダニエル・デフォー　著、平井正穂訳
岩波書店1967　岩波文庫
配架場所：文庫・新書＜請求記号933?DEF?１＞

©岩波書店

文＝福島　吉春（ふくしま　よしはる）
（経営情報学部教授）

岩波文庫版には下巻もあるが、上巻だけで独立していて、有名で、また面白い。内容はよく知られているように、ロビンソン・クルーソーなる船乗りが絶海の孤島に流されてから帰国するまでの話しである。このよく知られた漂流記が経営学や経済学でも盛んに取り上げられている。それは主人公クルーソーの行動が当時、17、8世紀に資本主義の基礎を築き、第1次産業革命を起こしたプロテスタントの勤勉さや価値観を表しているからである。たとえば、いちど沈没船に戻ったクルーソーは、金は無人島では価値がないと言って持ち帰らない。嵐を経験したときには、落雷によって火薬が一挙に失われるのを恐れて分散して置くことにする。そして漂流したことによる利益と損失を損益計算書の形式で表示する。

それにしてもクルーソーがよく計画を練って、そしてよく働くことには驚かされる。クルーソーのような行動原理が資本主義の基礎になったとする指摘はマックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（岩波文庫）にも、大塚久雄の『社会科学における人間』（岩波新書）にも書かれている。またいささか皮肉な口調でではあるが、カール・マルクスの『資本論』でも触れている。

なおデフォーは多作家で、簿記の教科書も書いているが、なかでも『ペスト』（中央公論社）あるいは『ロンドン・ペストの恐怖』（小学館）という作品では1660年代のロンドンを舞台に、ペストの大流行とそれに対するロンドン市民の行動を描いている。またその末尾では、後に古典派経済学者アダム・スミスが資本主義の成立基盤として掲げた「（神の）見えざる手」という用語も使っている。

そんなわけで『ロビンソン・クルーソー』、まだ読んでいない人にはぜひ読んでほしいし、もう読んだ人にも以上の経済学的、経営学的観点から、もういちど読んでほしい。

第三回（2010年度）北海道情報大学図書館賞

先に、第三回（２０１０年度）北海道情報大学図書館賞が実施され、平成22年12月1日に審査結果が発表されました。本学の図書館賞は、学生の読書力及び表現力の向上を図ることを目的に２００８年度から実施され、第三回目となる今年度は、第一部門：読書感想文十八編、第二部門：小論文七編の計二十五編と、昨年度より八編多く応募を頂きました。とりわけ、国際交流協定校の南京大学外国語学院日本語学部からは十一編もの応募を頂き、日本文化に対する理解の向上など所期の目的が果たされ、本学の「図書館賞」がよりグローバルな賞に成長していることを物語っています。

立花図書館長を委員長とした図書委員会委員五名名及び協力委員二名の計七名で構成された審査委員会の厳正な審査の結果、下記のとおり受賞作品が決定されました。残念ながら、今年度は両部門とも最優秀賞に該当する作品がありませんでした。

表彰式は、12月8日(水)学生プラザに於いて、長谷川学長、冨士副学長、中居常務理事、立花図書館長、近藤事務局長、審査委員各位の列席の下、各賞の受賞者に対し学長から賞状と副賞（図書カード）が贈られました。続いて、立花図書館長から応募作品全体に対する講評があった後、優秀賞の広瀬里美さんと藤井由紀子さんから受賞者の挨拶、中居常務理事からは祝辞をいただきました。

引き続き、会議室において受賞学生と学長、図書館長、審査に携わった教員、事務局長等との懇談会（昼食会）が催され、やや緊張気味の学生と学長等との和やかな懇談が行われ、読書の楽しみや論文作成の苦労などが語られました。

第三回（2010年度）北海道情報大学図書館賞

選考審査結果一覧

第一部門：読書感想文

★最優秀賞（該当作品なし）　◇副賞：図書カード（三万円分）

★優秀賞（二作品）　◇副賞：図書カード（二万円分）

◎「ジーキル博士とハイド氏」を読んで
広瀬　里美　経営情報学部先端経営学科三年

◎夏目漱石の「こころ」に見た自己欺瞞
藤井　由紀子　経営情報学部先端経営学科三年

★佳　作（五作品）　◇副賞：図書カード（一万円分）

◎「ガイアの復讐」を読んで
相馬　龍治　経営情報学部先端経営学科三年

◎～まさにファンタスティック！～　万城目学「鹿男あをによし」を読んで
村山　雄紀　経営情報学部先端経営学科三年

◎「砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない」
芹田　剛嗣　情報メディア学部情報メディア学科四年

◎『お菊さん』―ロティの日本文化の修業時代
紀　文心　南京大学外国語学院日本語学部日本語クラス

◎島崎藤村と「破戒」
鄧　海蓉　南京大学外国語学院日本語学部日本語クラス

★奨励賞（十一作品）　◇副賞：図書カード（三千円分）

◎「花は眠らない」について
楊　萍　南京大学外国語学院日本語学部日本語クラス

◎『田母神塾』、真剣に考える
内田　貴之　情報メディア学部情報メディア学科二年

◎「友情」を読んで友情を考えて
胡　海燕　南京大学外国語学院日本語学部日本語クラス

◎最後の救い――『人間失格』への解読
王　超　南京大学外国語学院日本語学部日本語クラス

講評

審査委員長　図書館長　立花　峰夫

北海道情報大学図書館賞は今年で三回目を迎えました。応募総数は年々増え、第一回目は十一名、第二回目は十九名ですので、昨年度より六名増えたことになります。昨年に引き続き、通信教育部生一名のほか、南京大学外国語学院日本語学科生十一名の応募もあり、一層国際性を深めたことになります。主催者として大変嬉しく思っております。

審査の結果、最優秀賞については、残念ながら、本年度も第一部（感想文部門）第二部（小論文部門）ともに「該当作品なし」となりました。これは審査員の先生方の一致した見解でした。総じて、読み手である審査員を説得する力が少しく不足していたと思います。

「読書感想文」であれば、対象となった作品を読んでいない人に対しても、思わずそれが読みたくなるような文章でなければなりません。また、小論文であれば、その主張（意見・判断）に客観性と十分な説得力が求められます。根拠のない単なる書き手の主張（意見・判断）だけでは読み手は納得しません。根拠となる資料・データを適切に示すとともに、論理的な筋道で文章を構成していく必要があります。

そんな中で、優秀賞になった人は、十分とは言えないまでもそれなりの説得力があったといえます。何より当該作品を読み込んで、自分の感想をよく煮詰め、独りよがりではない文章にまとめる努力があったものが選ばれました。

第一部門（読書感想文）の優秀賞受賞作品は、広瀬久美子さんの「『ジーキル博士とハイド氏』を読んで」と藤井由紀子さんの「夏目漱石の『こころ』に見た自己欺瞞」の二作品です。前者は対象作品のスリリングな印象が読み取れるものでした。後者は「先生」の陥った「自己欺瞞」をキイワードに読み込んだ点が評価されました。

第二部門（小論文部門）の優秀賞は二件とも南京大学生が受賞しました。徐莎莎さんの「『封建』、また一種の歴史観」と張強さんの「外国人研修制度および仲介留学に見られる問題点」の二作品です。前者は、「封建」の概念が日本や中国そして欧米では異なることを踏まえ歴史的に考察したもの。後者は、中国人の日本留学が抱える身近な問題を分析し解決策を論じたものです。

いずれも、読書の楽しさや独自の考えをまとめる努力を感じさせる作品でした。このような作品に出会えたのは大きな収穫でした。今後さらに多くの応募作品が寄せられることを期待します。

◎J・Dサリンジャー短編小説集
浅野　和紀　経営情報学部システム情報学科三年
◎「そして誰もいなくなった」
久保　和也　経営情報学部システム情報学科三年
◎「きらきらひかる」愛情の両側
胡　杨　情報メディア学部情報メディア学科三年
◎「投資銀行青春白書」を読んで
福田　嘉之　通信教育部　経営ネットワーク学科四年
◎被模倣才能　西尾維新著「ダブルダウン勘繰郎」感想文
四戸　理恵　情報メディア学部情報メディア学科二年
◎医者は過激な処置が好き。
岡本　敦史　経営情報学部医療情報学科二年
◎「SAーペイント完全マスター公認ガイドブック」
川村　健人　経営情報学部先端経営学科一年

第二部門：小論文

★最優秀賞（該当作品なし）◇副賞：図書カード（三万円分）

★優秀賞（二作品）◇副賞：図書カード（二万円分）
◎「封建」、また一種の歴史観
徐　莎莎　南京大学外国語学院日本語学部日本語クラス
◎外国人研修生制度および仲介留学に見られる問題点
張　強　南京大学外国語学院日本語学部日本語クラス

★佳　作（二作品）◇副賞：図書カード（一万円分）
◎本当の男女平等を求め
杨　菲　南京大学外国語学院日本語学部日本語クラス
◎零
劉　雅君　南京大学外国語学院日本語学部日本語クラス

★奨励賞（三作品）◇副賞：図書カード（三千円分）
◎私の夢
安　莉　南京大学外国語学院日本語学部日本語クラス
◎現代の貧困
渡邊　龍之輔　経営情報学部先端経営学科三年
◎旅のあいだ
尚　静雪　南京大学外国語学院日本語学部日本語クラス

第3回（2010年度）北海道情報大学図書館賞 受賞作品より

第一部門：読書感想文

優秀賞

「ジーキル博士とハイド氏」を読んで

経営情報学部 先端経営学科三年　広瀬 里美

この物語の大筋はよく知られているかもしれませんが、ジーキル博士という紳士的な博士が薬を飲むことによって、自己の悪の部分だけが抽出された人格を持つハイド氏という人物に変身するという話です。

物語の始まりはジーキル博士の友人で弁護士のアタスン氏が古くからの友人と夜の散歩をしている際に、街で友人が実際に出会った奇妙な出来事について話を聞くところから始まります。その出来事とは、「真夜中の帰宅途中にある男が少女とぶつかった。男は少女に謝るどころか踏みつけるなどの暴行を加えた。それを見かけた人々は男を攻め立てた。すると男はごたごた話にしたくないので金を払うと言う。人々は払えるはずもないと百ポンドを要求した。すると男は近くにあった汚い小屋に向いそこから小切手を持ってきた。その小切手の払い出し人の名前欄にはジーキル博士の名前が書かれていた。友人はジーキル博士がその男にゆすられているに違いないと感じた。」というものです。友人とアタスン氏が会話を交わすうちにこの乱暴をした男がハイドという名前であることが分かります。

アタスン氏はハイドという名前に聞きおぼえがありました。アタスン氏は小切手に名前が書かれたジーキル博士とは昔からの友人でもあり顧問弁護士も務めていました。ジーキル博士はアタスン氏に一通の遺言状を託しており、そこには相続人としてハイド氏の名前が書かれていました。

ここで私が疑問を最初に感じたのは、なぜ街の人は暴行を加えた男がハイド氏の人格であるとはいえ、ジーキル博士だと気付かなかったのかという点です。しかしこの疑問は物語を読み進めるうちに解決します。ジーキル博士は薬を飲むことによってハイド氏に変身するわけですが、このときに体の大きさや顔も醜く変わってしまうのでした。ジーキル博士は背が高くすらりとした見た目で、人格も温厚で紳士的なため誰にでも好かれる人物です。それに比べハイド氏は、背が低く猿のような見た目で、人格面も乱暴者で最後には殺人事件までを超こすような人物です。このような姿に変身すればジーキル博士の今までの名声に傷がつくことなく悪行を重ねることができます。ジーキル博士がアタスン氏に相続手続きを依頼した理由は、もし自分がハイドにいつか飲み込まれてしまっても、今までの財産は自分自身の手におさめるためでした。

ここで私は顔や体が醜く変化したのは薬だけの効果なのだろうかと考えました。人は何か憎悪を抱くような出来事があると、顔がゆがむことがあります。ハイド氏はジーキル博士の悪の集合体なわけですから、薬の効果というよりも悪の部分が見た目にも変化をもたらしたのではないかと思いました。

そもそもジーキル博士がハイド氏を生みだそうと考えたきっかけは、ジーキル博士は自己の欠点を「抑えることのできない享楽性」と考えており、これを自分の中で隠蔽してきました。そのため善悪が自らの中で戦い続けたことにより、いつのころからかこの善悪を分離させる薬の研究に没頭し始めました。そしてついに完成させてしまいます。この薬により自己の善い部分と悪い部分を分けることでそれぞれ戦い合わせることなく存在が可能になると考えたようです。

しかし実際このような実験がうまくいくことはなく、悪の部分と分離させようとしたときには「骨骨の砕けるような痛み、死ぬほどの吐き気、生まれ出る刹那、断末魔の刹那の恐怖にも劣らぬ精神の恐怖」がジーキル博士を襲います。そして次第に薬がなくてもハイドに変身できるようにさえなってしまいます。これは人は悪に染まると抜けだそうとしても抜け出せず、次第に堕落していくことを示しているのだろうと思いました。

私はこの本を読み、最初ハイド氏は完全な悪ではないと感じました。ハイド氏が行った非道徳的な行為と言えば少女を踏みつけ、老人をステッキで殴り殺すといったことしか書かれていません。これら

の行動が肯定できる行為とは決して思いませんが完全な悪人であるとすれば、例えば快楽を満たすためにもっと何人もの人を殺したり、金が欲しいという理由で銀行強盗をしたり、人が多く集まるところに毒を撒いたりなどという行為を行うのではないかと考えました。しかしハイド氏はこれらの誰でも思いつきそうな行為には及ばず、出会いがしらに衝動的にやってしまったとしか思えない行為、また数件しか犯罪行為に及んでいない所を見る限り、ジーキル博士の作った薬は変身する際の猛烈な痛みを伴うという以外にも、自己の中の完全な悪を抽出するのにも失敗しているのではないかと感じました。しかしこれは現代社会で、ニュースを見るたびに凶悪事件が起きている世界で生きている私だからこそ感じることであり、この本が書かれた１８８６年においては、ハイドの所業はとても凶悪性のある行為だったのかもしれません。

次に感じたことは、人はよく耳にするように「陰と陽」で出来ているということです。人は誰もが人に見せる部分に陽の部分を持ってくることによって日常生活を円滑に進めようとします。みんながハイドのように陰の部分だけを前面に持ってくると日常生活どころか国家さえ成り立たなくなってしまうのではないでしょうか。ジーキル博士は陽の部分を人よりも保とうとする気持ちが強すぎた故に、ハイドという人格を生みだしてしまいますが、今の現代社会におけるネット上でも似たような関係性が生まれているのではないかと思いました。最近自分の生活を保つために陽の部分を保つのに必死になっているのではないかとニュースなどを見るたびに感じます。ゆえにネット上で現実生活ではとても言えないような暴言を吐いたりなど、陰の部分を見せる人が増えています。これが当たり前と感じるのは時代だからという言葉では流してはいけない現実だと思います。

また先にも書きましたが、人は悪に染まると抜けだせないという教訓もこの物語には含まれているのではないかと感じました。最初はただ善と悪の部分を分けるためだけに研究していた薬も、次第にハイドの傍若無人な振る舞いに快感を覚えたことによって何回も変身をします。するとある時点からジーキル博士からハイドに変身するときに薬を飲まずとも変身できるようになってしまいます。ある晩、目を覚ますと薬を飲んでいないのにもかかわらずハイドに変身していることに大変な恐怖を覚え、二か月ほど薬を飲まず変身をしない生活を送ります。しかしジーキル博士は自分がこんなにも抑圧した生活を送っているにもかかわらず、ハイドは何の意識もしないということに対し憧れを抱き始め、結局薬を飲んでしまいハイドに変身してしまいます。このジーキル博士の一連の行動を振り返ると薬物中毒者やアルコール依存症患者を思い出しました。

この本は最初はただの二重人格者の話だと思っていましたが、ミステリー作品としても楽しく読め、実は人間に対する教訓を含んでるところや、現代での生活に置き換えてみてもジーキル博士とハイド氏のような関係性が見られるところにとても感動しました。

第一部門：読書感想文

優秀賞

夏目漱石の〝こころ〟に見た自己欺瞞

経営情報学部　先端経営学科三年　藤井　由紀子

少し前に、「自分の小さな『箱』から脱出する方法」という本を読んだ。

この本には、なぜ人間は「自己欺瞞」を行ってしまうのか、そして「自己欺瞞」にどう対処すべきなのかといった内容が書かれており、世界的なベストセラーとなっているそうである。

「自己欺瞞」とは、単純に述べると「自分自身を欺くこと」である。他者に何かしてあげようと考えたが、それをしなかったという経験が、誰しも一度は経験しているのではないだろうか。例えば、「バスで席を譲ろうと思ったが、それをしなかった」とき。こういったときに、人間は「自己欺瞞」に陥ることがある。「自己欺瞞」に陥ってしまった場合、「席を譲ろうと思った自分の意思に背いた」ことになる。自分の意思に背いた結果、「いや、他の人はなぜ席を譲ろうとしないんだ。私は悪くない」と、他者のせいにしてしまう。このとき、他者のせいにしたことで、自分の意思に背いたことには気づくことがない。これを「自己欺瞞」と呼ぶのである。「自分の小さな『箱』から脱出する方法」では、このような個人の「自己欺瞞」が、企業や家庭などの組織にもたらす影響や問題、そしてその解決策が書いてあり、非常に興味深い内容であった。

さて、夏目漱石の代表作である長編小説、「こころ」。親友を裏切り、恋人を得ることができたが、親友が自殺したことで罪悪感に苛まれ自殺してしまう「先生」の心を描いた作品である。「上　先生と私」「中　両親と私」「下　先生と遺書」の三つの章で構成され、特に「下　先生と遺書」においては、長いあいだ高等学校の現代国語の教科書に掲載されている。

「上　先生と私」では、知識人でもあり、どこか謎めいている「先生」と、書生である「私」が鎌倉で出会い、交流を始める。「先生」は「私」に向かって、〈貴方は死という事実をまだ真面目に考えた事がありませんね〉と言う。その後も二人は交流を続けていくが、「私」が「先生」について、以下の印象的な描写をする場面がある。

〈先生は何時も静であった。ある時は静過ぎて淋しい位であった。私は最初から先生には近づき難い不思議があるように思っていた。それでいて、どうしても近づかなければいられないという感じが、何処かに強く働らいた。（中略）人間を愛し得る人、愛せずにはいられない人、それでいて自分の懐に入ろうとするものを、手をひろげて抱き締める事のできない人、―これが先生であった。〉

「中　両親と私」においては、「私」の父親が病気を患っていく中、明治天皇が崩御、そして乃木希典が殉死する。「私」の父親もとうとう危篤状態になるが、そのとき「先生」から手紙が届く。〈この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世には居ないでしょう。とくに死んでいるでしょう〉と。

漱石は明治天皇と乃木希典の「死」に影響を受け、「こころ」を執筆したと語っている。また、漱石の他に、森鴎外もこの殉死の五日後、「興津弥五右衛門の遺書」を執筆している。

このように、明治天皇の崩御と乃木希典の殉死は、当時明治を生きていた人々にとって衝撃的な出来事であったに違いない。作中、「先生」が遺書の中で〈その時私は明治の精神が天皇に始まって天皇に終ったような気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、その後に生き残っているのは必竟時勢遅れだという感じが烈しく私の胸を打ちました〉と述べる場面がある。これは、明治天皇と乃木希典の「死」が「明治の終焉」を意味するものであり、漱石は「新しい時代」が来るのを受け入れたということなのだろう。

さて、ここまでの「上　先生と私」「中　両親と私」の語り手である「私」にかわり、「下　先生と遺書」からは「私」宛てに届いた「先生」の遺書の内容ということで、「先生」の視点から物語が描かれている。「先生」は親友である「K」という男を裏切り、恋人を得て結婚をしたことを、「私」に向かって告白をする。

「上　先生と私」で「私」が〈私は最初から先生には近づき難い不思議があるように思っていた。それでいて、どうしても近づかなければいられないという感じが、何処かに強く働らいた〉と言うが、なぜそのように「私」をそう思わせたのか。そして〈人間を愛し得る人、愛せずにはいられない人、それでいて自分の懐に入ろうとするものを、手をひろげて抱き締める事のできない人〉である「先生」

は、どう生きたのか。

「先生」が最初に打ち明けたのは、〈私が両親を亡くしたのは、まだ私の二十歳にならない時分でした。〉ということ、そして〈一口でいうと、叔父は私の財産を誤魔化したのです〉ということである。〈このくらい私の父から信用されたり、褒められたりしていた叔父を、私がどうして疑う事ができるでしょう。私にはただでさえ誇りになるべき叔父でした。父や母が亡くなって、万事その人の世話にならなければならない私には、もう単なる誇りではなかったのです。私の存在に必要な人間になっていたのです。〉と、愛する自分の父が認める人間であり、そして自分の誇りである叔父に裏切られたのである。

この出来事について、「先生」は遺書の中で〈それが私の煩悶や苦悩に向って、積極的に大きな力を添えているのは慥かですから覚えていて下さい〉と言っているように、先生の心に暗い影を落としたことが分かる。

「先生」が大きく苦しんだのは、まだ二十歳にならない時分に〈ただ子供らしく〉、〈私は父や母がこの世にいなくなった後でも、いた時と同じように私を愛してくれるものと、どこか心の奥で信じていた〉ことだ。父や母を信じ、そして父の信じた叔父を信じ、裏切られたことで、〈他のものも必ず自分を欺くに違いない〉という自分なりの論理を信じなくては、また苦しむことになる、と「先生」は考えたのである。「先生」がこのように「他人への信頼」から「経験による自分の論理への信頼」を強く持たなくてはならないという決意と苦しみが、〈私は国を立つ前に、また父と母の墓へ参りました。私はそれぎりその墓を見た事がありません。もう永久に見る機会も来ないでしょう。〉という台詞に深く裏付けられているように思う。

そして「先生」は、ある素人下宿―〈ある軍人の家族、というよりもむしろ遺族、の住んでいる家〉―に住むことになり、そこで出会う「お嬢さん」に恋をする。他人を信じることをやめ、疑り深くなった「先生」であったが、〈私はただ一言付け足しておきましょう。私は金に対して人類を疑ったけれども、愛に対しては、まだ人類を疑わなかったのです。だから他から見ると変なものでも、また自分で考えてみて、矛盾したものでも、私の胸のなかでは平気で両立していたのです〉と述べる。そして〈私は他を信じないと心に誓いながら、絶対にお嬢さんを信じていたのですから。〉と、自身の矛盾をこう説明している。

そこに、「先生」は古くからの友人である「K」を下宿に住まわせた。「K」は真宗の坊さんの次男であり、ある医者のところへ養子として迎えられたのだが、医者にするつもりであった養家の意思とは反対に、「K」は医者にならない決心を持ち、そのことを隠しながら東京へ出た。しかし「K」は自ら養家先へ、詐りを白状する手紙を書いたが、養家先にも実家にも勘当されてしまったのだ。「K」は意志の強い男であったので、勘当されても自分で自分の身はどうにかする、と決意するのである。

「先生」にとって、「K」は自分よりも上の存在に映っており、時折「K」に対する劣等感を思わせるような台詞が出てくる。「K」が勘当された時、彼自身は自分一人で生きると決意するが、少しずつ神経が衰弱していく「K」を見ていた「先生」は、無理を押し切って「K」を下宿に連れてくるのである。この点において、「先生」は「K」のことを労っているというよりは、「K」のことを労る「自分」に、「K」への優位性を得ようとしたのだと思われる。そのため、「先生」と「K」が二人きりで房州を旅したときの心情を「先生」は、〈Kの神経衰弱はこの時もうよくなっていたらしいのです。それと反比例に、私の方は段々過敏になって来ていたのです。私は自分より落ち付いているKを見て、羨ましがりました。また憎らしがりました。彼はどうしても私に取り合う気色を見せなかったからです。私にはそれが一種の自信のごとく映りました。しかしその自信を彼に認めたところで、私は決して満足できなかったのです〉と言うのである。

「先生」はこの頃になって、「お嬢さん」に対する気持ちを「K」や「奥さん」に伝えようと考え始める。しかし、しきりに言い訳をし、打ち明けることをしないのである。「先生」は後に遺書で〈思い切ってそれを突き破るだけの勇気が私に欠けていたのだという事をここに自白します〉と言う。

「先生」は、恋を打ち明けようと思うものの、他人からの裏切りがあった過去によって、踏み出すことができない。それでいて「お嬢さん」に対して〈ほとんど信仰に近い愛をもっていた〉のだ。そして、〈私は金に対して人類を疑ったけれども、愛に対しては、まだ人類を疑わなかったのです。だから他から見ると変なものでも、また自分で考えてみて、矛盾したものでも、私の胸のなかでは平気で両立していたのです。〉と言うように、自らの矛盾に気づきながらも、自らの勇気が欠けていることを過去や他者のせいにしてしまった。これが「先生」の陥った「自己欺瞞」なのではないだろうか。

そしてその後、踏み出すことができない「先生」の心など知らずに、Kはお嬢さんへ

の恋を告白するのである。「先生」は〈そうして、すぐ失策ったと思いました。先を越されたなと思いました。〉と感じているものの、〈相手は自分より強いのだという恐怖の念が萌し始めたのです。〉と言い、また〈私は彼の強い事を知っていました。また彼の真面目な事を知っていました。〉と、まだ動けずにいたのである。

しかし意外なことに、恋を打ち明けた「K」には一つの迷いがあった。「K」は真宗への信仰心を強く持って生きてきたために、自分の信仰心と恋心との間に生まれる矛盾があったのである。そのため、「K」は「先生」に漠然と、〈どう思う〉と聞くのである。

そして「先生」は当時をこう述べるのだ。〈Kが理想と現実の間に彷徨してふらふらしているのを発見した私は、ただ一打で彼を倒す事ができるだろうという点にばかり眼を着けました。そうしてすぐ彼の虚に付け込んだのです。私は彼に向って急に厳粛な改まった態度を示し出しました。無論策略からですが、その態度に相応するくらいな緊張した気分もあったのですから、自分に滑稽だの羞恥だのを感ずる余裕はありませんでした。私はまず「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」といい放ちました。これは二人で房州を旅行している際、Kが私に向って使った言葉です。私は彼の使った通りを、彼と同じような口調で、再び彼に投げ返したのです。しかし決して復讐ではありません。私は復讐以上に残酷な意味をもっていたという事を自白します。私はその一言でKの前に横たわる恋の行手を塞ごうとしたのです。〉。

「先生」はその後、奥さんに「お嬢さん」への恋を告白するのである。そして奥さんの口から「K」へ、「先生」と「お嬢さん」との新しい関係が伝えられる。そしてその後、「K」が自殺を図るのである。

〈私はまたああ失策ったと思いました。もう取り返しが付かないという黒い光が、私の未来を貫いて、一瞬間に私の前に横たわる全生涯を物凄く照らしました。そうして私はがたがたふる顫え出したのです〉とあるように、この「K」の死は、「先生」が自分自身に感じてきた矛盾やエゴ、裏切り、嫉妬、執着、人間の汚い部分をすべて晒され、同時にそこから逃げることのできない決定的なものとなったのである。そして「先生」は、とうとう自分自身の「自己欺瞞」に向き合うことになったのだ。

「先生」は遺書の終盤において〈他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなったのです〉と言っている。「K」の死によって、自分の裏切りが明白なものとして自分自身に突き刺さったのである。そして、他人を信用できないどころか、自分自身をも裏切ったこと—自己欺瞞—に気づき、自分自身を信じることもできなくなってしまったのである。

「先生」のこれらの出来事のあと、「上　先生と私」の中で、「先生」は「私」との交流を始める。「先生」は言う。〈あなたは私の思想とか意見とかいうものと、私の過去とを、ごちゃごちゃに考えているんじゃありませんか。〉と。それに対し「私」は〈別問題とは思われません。先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです。二つのものを切り離したら、私には殆んど価値のないものになります。私は魂の吹き込まれていない人形を与えられただけで、満足は出来ないのです〉と意見する。

そして二人は続ける。〈先生はあきれたと云った風に、私の顔を見た。巻烟草を持っていたその手が少し顫えた。「あなたは大胆だ」「ただ真面目なんです。真面目に人生から教訓を受けたいのです」「私の過去を訐いてもですか」（中略）「あなたは本当に真面目なんですか」と先生が念を押した。「私は過去の因果で、人を疑りつけている。だから実はあなたも疑っている。然しどうもあなただけは疑りたくない。あなたは疑るには余りに単純すぎる様だ。私は死ぬ前にたった一人で好いから、他を信用して死にたいと思っている。あなたはそのたった一人になれますか。なってくれますか。あなたは腹の底から真面目ですか」「もし私の命が真面目なものなら、私の今いった事も真面目です」私の声は顫えた。〉

二人の間で交わされる「真面目」という言葉はずしりと重みを持っている。それは、この「真面目」という言葉の中に、命の重みが裏付けられているからであろう。

そして、他人も自分自身も信じられなくなった先生にとって、真面目な「私」の存在はとても大きなものだったのだろう。「私」を信じすべてを打ち明けることは、「先生」にとっての決意であり、「先生」が自分自身をまっすぐに見つめること、また「明治」から「新しい時代」への希望のようにも思える。

矛盾やエゴ、裏切り、嫉妬、執着、人間の汚い部分を曝け出しながらも、複雑でいて素直に、そして細やかに人間らしさを描いたからこそ、百年以上の月日を経ても、漱石の文学はなお読まれ続けているのではないだろうか。

第二部門：小論文

優秀賞

「封建」、また一種の歴史観

南京大学外国語学院日本語学部日本語クラス 院生一年　徐 莎莎

ある時期、私が「封建社会」という言葉が国によって、あるいは歴史的時期によって意味が変わってくるということに気づいた。そして中国と日本の場合、この名詞をめぐって、中国の学界と日本の学界、また中国の学界内部でもいろいろな意見があり、お互いにあまり理解できないようである。現在の時点で、自分が持っているわずかな知識だけでは大変難しいことでありながら、以下で「封建」という概念、またこの概念の変遷の一側面を見せようと試みる。

一、日本における「封建」

日本語の中の「封建」は、主に二つの意味がある。ひとつは、古代、中国か伝えられた、「天子の下に、多くの諸侯が封地を領有し、諸侯が各自の領内の政治の全権を握る」という政治制度をさす。もうひとつは、欧米から渡来した「フューダリズム」という言葉の内容を指し、主に二つの意味を含んでいる。狭義的には、領主が家臣に封地を給与し、代わりに軍役の義務を課するという政治制度をさす。すなわち、この政治制度は土地を仲立ちにした主従関係を中核とするのである。広義的には、農奴制による経済制度も含む幅広い封建的な社会制度をさす。日本の学者が既存名詞の「封建」をもって「フューダリズム」と訳したのは、実にすばらしかったと思う。なぜかというと、まず、この訳し方は、二つの言葉がさす対象の、中央政権が権力と土地を分配し、下から、ピラミッドのように国家組織を築き上げるという共通の特徴をつかんでいるからだ。次に、東西の「封建」は各方面でだいぶ違っているが、日本の場合だけは意外に中世の西欧社会と似ていることが明らかになったからだ。当時、この言葉を訳した学者はこの点にまだ気づいていなかったかもしれないが、彼の訳によって、アジア国家の中でのこうした日本の独特の社会状況が明確となり、それ以来の日本の歴史研究における多くの混乱と面倒を避けることができたのである。

確かに、日本の前近代社会と中世ヨーロッパ社会と比べれば、日本の領主制とヨーロッパの土地恩給制、日本の将軍―武士の主従制とヨーロッパの家人制とは大変似ている。それ以外にも、農奴を人身的、経済的に強く支配するという点も共通する。それらの共通点は、日本で封建社会が存在したという視点を支える。たとえば、日本に三年滞在した、イギリスの外交官のオールコックは、日本が「東洋版のフューダリズム」であると、『大君の都』の中で言っている。また、封建社会についての研究の集大成者とも言えるマルクブロックも、日本社会を深く研究した上、「日本もヨーロッパのように封建社会という段階を経た」との結論を出し、その他の欧米の諸歴史学者もヨーロッパにこだわらず、世界中のフューダリズムを探求し始めた。その結果、ヨーロッパを除き、日本以外の国家に封建社会が存在していなかったという見方が認められようになった。しいて言えば、中国の魏晋時代と周朝もある程度にフューダリズムといえるが、総体的には、日本はヨーロッパ以外のひとつの特例と広くみなされている。史的唯物論の立場に立つマルクスもそう考えていた。経済的な面を重んじる彼は、日本の農奴と領主の間の従属関係から、「日本に見られる純封建的な土地所有システムと発達した小農民経営は西欧中世像の再現である」という旨を示し、近世日本が封建社会であるとの結論の理論的根拠としたのだ。

一方、日本国内でも、封建社会の時期については定説がないものの、日本で封建社会が存在したことはもう広く認められている。

特に、ここで言いたいのは、日本で使われる「封建」は、中国の伝統的用法と欧米的な意味が重なって含まれるということだ。ただし、この二つの意味は多くの場合で共通しているので、あまりぶつかっていないようである。そのおかげで、中国の学界とは対照的に、「封建」という言葉は、意味上の混乱がなく日本の歴史学界で一貫して使われてきた。

二、中国における「封建」

最初に、「フューダリズム」を「封建」と訳した中国人は厳復である。彼の訳は日本より十数年も遅れたが、一般には独立視されている。これは偶然ともいえるが、じっくりと考えてみれば、日本語の「封建」も中国から伝えられたので、中国語とまったく同じものをさすはずであろう。だから、両国の訳者が同じ言葉を使用したのは、自然な結果ではないだろうか。

その後、特に日清戦争の後、中国の知識人はずっと積極的

に中国の歴史や社会状況を研究し、国を救う方法を探し出すために努力していた。無論のこと、封建についての論議もあった。このころは、「封建」は中国の伝統的用法と欧米的な意味が両方とも含まれており、あまり混同されていなかった。厳復や梁啓超や孫文は自分の書いた文章の中で、分封制が行われた周朝を封建視すると同時に、中国とヨーロッパの「封建」の区別をも重視している。

ところが、「五四運動」の時期になって、「封建」という語彙の混乱期の幕を開けた。『青年雑誌』（後の『新青年』）で、陳独秀が発表した『敬告青年』の中で、「封建制度」と「絶対君主制度」が同一視されている。陳は、近代文明と対立する、時代に遅れたすべての陳腐な制度を大まかに「封建制度」と呼んだわけである。

実は、陳のこの見方は、彼の日本での見学の経験から生じたものとも言えよう。間違いなく、明治年間の啓蒙学者はフランスの啓蒙運動を倣って、時代に遅れた制度や習俗を「封建的」と一概に呼んでいたのだ。しかし、前近代のヨーロッパと前近代の日本社会は確かに「封建的」だった。それに対し、前近代の中国は「非封建的」だったのである。この点から見ると、陳独秀の論議は「封建」の本義とだいぶ離れてしまったのではなかろうか。おそらく当時の陳は、主なる意図は、「反封建」をスローガンとし、学生運動や国民運動に精神的な力を注ぐのだったかもしれない。だが、彼が創始した「封建」から数多くのフレーズが派生され、そこから生れた「封建専制社会」、「封建地主階級」、「封建専制君主」、「封建専制皇権」などの言葉は「封建」の意味を大変混乱させていった。この時期からこそ、今の中国人が受け入れている、広義化された「封建」が登場したのだ。そして、二十世紀二十、三十年代、中国の歴史学界は封建社会についての論争でにぎわっていた。「西周封建論」、「戦国封建論」、「両漢封建論」などが激しく争った末、郭沫若の「戦国封建論」は毛沢東の支持を得て、後で毛が著した『中国革命と中国共産党』と『新民主主義論』の中で定着した。この説は毛の著作の力を借りて広く伝えられ、最終的には毛沢東の政権の確立により、動揺できないほどの真理とみなされてきた。

しかし、こうした用法がおかしいのは、戦国、特に秦以降二千年ぐらいの中国社会において、自給自足の小私有経営の農業経済は「封建的」な農奴制とだいぶ違うのみならず、中央集権の権力構造も、権力と土地を各領主に分配する「封建的」な権力構造と根本的に違っていることである。逆に、始皇帝が実施した「郡県制」は「廃封建」の行為と見てもいいだろう。では、こんな非論理的な結論を支える根拠はいったいどこからだろう。

実は、こうした見方は、レーニンやスターリン、またはコミンテルンから受けた影響が多かったのだ。レーニンは主に経済的な視点から、小農経済を封建社会の本質的な特徴としている。彼はこの点から、当時のアジア諸国（日本を除く）の性質を「半封建社会」あるいは「半封建半植民地社会」と認定した。この見方が１９１２年に提出され、そして１９２３年前後、コミンテルンの文献を通じて中国に輸入された。そのとき、中国は欧米や日本よる侵略のため、深刻な危機に陥っているところだった。中国の人々、特に知識人や学生たちはあせりを持ちながら、自分の国家と民族を救える道を探していた。ちょうどこのころ、十月革命の成功は中国人に希望をもたらした。こうしたマルクス主義の影響が、レーニンの封建論をいっそう受け入れやすい状況にしたのである。確かに、１９４９年以降の中国にとっては、一致しているイデオロギー、またこのイデオロギーの下に存在する、一致している歴史観が重要きわまるものになる。しかし、レーニンが論じた「封建」はもう本義とはるかに離れており、大幅に広義化された。彼の理論を踏襲する「封建」、この言葉こそ、現在の中国人の大部分が知っている概念である。それゆえ、今の中国の学界と日本の学界の間で起きた「封建」についての論争も理解できないものではないだろう。

三、簡単に言い尽くせない感想

私の周りでは、中国では二千年に渡る封建社会が確実に存在したと思い込んでいる人が圧倒に多い。それは、歴史教科書など与えた影響の賜物に他ならないと思う。それのみならず、人類の歴史は「原始社会」、「奴隷社会」、「封建社会」、「資本主義社会」、「社会主義社会」と五つの社会形態に分かれるという歴史観も、広く普及されている。こういうような理論は、マルクスの史的唯物論というより、政治活動のために定着された理論といったほうが良いかもしれません。

実は、マルクス本人はこういう大まかな扱い方に賛成していなかった。彼とエンゲルスはただヨーロッパ社会の実況に基づき、過去のヨーロッパの歴史学界の伝統に従い、自分の歴史観システムを建てあげただけである。そのため、マルクスはヨーロッパの封建制を特別視するからこそ、「封建制」という観念をほかの社会に無理やりに当てはまることに、同意を示さなかった。また、後期のマルクスも欧米

以外の社会を調べて研究し、世界中の前近代社会を「アジア的」、「スラブ的」、「ゲルマン的」などと細かく分類したことも、後に残された手稿の中で判明されたのである。また、同じ時代に、中国の古代社会を研究している外国学者も少なくなかった。たとえば、ウェーバーが秦以前の中国社会を「封建的」だと考えており、秦以降の中国は「封建」と対立すると強調した。一方、ラッセルも中国社会の特性を強調し、ヨーロッパと区別して研究しようと提案した。

ところで、既存の観念を正しいものと思い込んでいる私たちが犯した一番重大な、言い換えれば、一番根本的な間違いは何だろうか。私は、「観念」という人間自身の作り物を人間の先に置くからと思う。マルクスも含む欧米の歴史学者はヨーロッパの具体的な実況から各種類の理論を提出した。その過程の中で、「封建」という用語を使い間違えた、あるいは広義化したこともあるが、基本的には、大きな混乱は起こっていなかった。日本の場合もそうだ。しかし、中国人が欧米の学説を導入したとき、「どの人間社会でもたったの五つの社会段階に属すべきだ」という観念を前提とし、ヨーロッパと中国それぞれの特性を無視して勝手に歴史を書いた。しかも中国人が使った「封建」はもう欧米の本義とだいぶ離れた。数千年の豊富かつ複雑な中国の歴史はこうやって投げ捨てられてしまった。

また、上述の大まかな分け方にもうひとつの間違いもあることだ。それは、歴史を単線式に発展するものとみなすことだ。歴史そのものは、どんなときでも、私たちの想像通り、または教科書の教えた通りには起こらない。混乱している歴史の内部では、経済や文化や政治などの線が交錯している。現在中国の主流の分け方によると、一つの社会がいったんある段階に入ると、すべての方面の水準がこの段階の標準に達するべきだということになる。しかし、こんな歴史はこの世に存在しない。休まずに変動しつつある歴史を既定の理論（しかもこの理論自身も混乱している）の枠組みに入れるのは、不可能な任務だと思う。前述のように、これもやはり観念を人間の先に置くという間違いなのだ。さらに、「封建」問題は歴史学上の問題だけでなく、言語学や文化学上の問題でもあると思う。「封建社会」に序文を書いたT・S・ブラウンが言った通り、「フューダリズム」という言葉の意味はそれぞれで、勝手にある特定の時代に当てはまるならば、真実を捻じ曲げる可能性が生み出される。それも某種の構造主義に他ならない。すなわち、簡単にひとつの名詞で時代を総括する行為は、危険といっても言い過ぎではないだろう。反面、言葉で物事を総括することもまた重要なのだ。そうしなければ、歴史学や社会学などはまったく成立しえないだろう。それゆえ、歴史学者や言語学者や社会学者は古くから言語および人間の複雑さと戦ってきた。「言葉の歴史を編纂することは、文化の歴史を編纂するのと等しい」と、陳寅恪のこの見方に、私はこのうえもなく賛成している。

ここで、もうひとつの具体的な例を挙げてみよう。「五千年の文明国家」とのフレーズが全国に普及されるにつれて、国民の多くは、中国が五千年の文明氏を持つと確信するようになっている。疑うことなく、中国は古い歴史を持っている国であるが、国際的には普通はわずか三千五百年と考えられている。すなわち、商朝から中国が文明社会に入ったとされているのだ。いわゆる「五千年」は、黄帝時代から数えて得た数字である。しかも、黄帝時代と夏朝はただ『国語』や『史記』などに記された「紙上の時代」であり、いまだに何の考古学的証拠も発掘されていない。だからもちろん、確実な存在期間もわからない。こう見れば、中国人の「五千年」はどうしても疑わなければならない。それ以外にも、「文明社会」に入るメルクマークを、よく検討すべきだと思う。そのメルクマールは陶器の出現か、青銅器の出現か、都市の出現か、あるいは権力組織の出現か、実に頭が痛くなる難問だ。歴史学者はこんなに混乱している考古学的証拠で、歴史をまとめるのだ。ところが、歴史学者が出した結論が民衆に伝えられるとき、単純化され、捻じ曲げられることは珍しくない。それとともに、言語の元の意味もどんどん流失してしまう。最後に残るのは、生命のない符号だけかもしれない。もっと危ないのは、このような生命のない符号による概念が人々の頭に固定化されると、逆に歴史自体に対する認識を制限することだ。上述の「五千年の文明国家」もそうだ。中国人が「五千年」という言い方を受け入れてしまった後は、自分の国の源をはっきりと探求しようとする人も少なくなるだろう。こういうような認識上の誤りをこのままにするなら、危険のきわみだと思う。

本題に戻ると、「封建」との言葉が、本来の意味が濫用されているうちに流失していったかもしれないが、われわれができるのは、言葉を通じ、自我に属する言語と歴史の本当の姿を究めようであろう。

第二部門：小論文

優秀賞

外国人研修生制度および仲介留学に見られる問題点

南京大学外国語学院日本語学部日本語クラス　四年　張強

近年来、外国人研修生制度による悪質な侵害の実態が次々と浮き上がってきた。いろいろな非難を浴びた結果、２０１０年7月1日に出入国管理及び難民認定法が改正された。が、「実務が伴わない技能習得のみが認められる」と明記され、「研修」という在留資格は依然として存続することにより、抜本的な改革とは言えない。一方、仲介機関を通じて決められている額の「仲介費」を出し、留学資格を取得し渡日する仲介留学は年々増加しつつある。しかし、それにつれて不法滞在や外国人犯罪などの問題もしばしば起こり、金融危機以来、緩和する傾向が示されているが、根本的な撲滅はまだ重大な課題であろう。ここでは外国人研修生制度と仲介留学の問題点に注目し、その中の最大の団体である中国人を例として分析する。

最初に外国人研修生制度について述べる。「外国人研修生」は、民営または国公営の送出し機関から送出されて来日し、日本側の受入れ機関において研修する。研修生の滞在期間は、基本的には一年以内である。開発途上国への技術移転を確実に行うため研修計画が作成され、研修生はこれにそって研修する。その後、国の技能検定基礎二級相当に合格する等、所定の要件を満たした場合には、同一機関（会社）で実践的な技術習得のために雇用関係の下で更に2年間滞在することが可能となる。これを技能実習といい、研修・技能実習と合わせると最長三年間の滞在期間となる。受入れ方式は大きく二種類に分かれ、事業協同組合や商工会議所等がそのメンバーである企業等と協力して行う研修生を受入れる形態を「団体監理型」といい、受入れ機関の合弁企業・現地法人・一定の取引先企業等から企業単独で受入れる形態を「企業単独型」という。受入れが可能な研修生数は、原則として、受入れ企業の常勤職員二十名に付き、研修生一名である。研修生はもともと技術を学ぶために日本に来たが、実際に多方面の原因で単純労働力扱いとされかねない。日本は生産の拡大につれて日本国内の労働力不足が深刻化する中、企業側からは人件費の安い外国人単純労働力を導入することを許すよう何度も日本政府に求めたが、最終的には批准されなかった。それで、経費削減を唱える中小企業は追い詰められ、外国人研修生制度を利用し、海外の仲介機関と契約を結んだりして形を変えただけで外国人単純労働力を導入し始めた。

外国人研修生は大体いわゆる３Ｋ（きつい、汚い、危険）職種の仕事をやらされ、さらに正常労働時間のほかに無理やりに残業をさせられ、最低賃金を下回る給料で働かされている。それに、企業側は外国人研修生の逃走を防止し、外国人研修生が入国する次第、パスポートを取り上げることなど、労働者の行動自由を制限することもする。２０１０年6月6日に、中国人実習生として渡日した蒋暁東さんが来日中過労で死亡した。２０１０年7月2日、遺族により中国人実習生過労死の労災認定申請が始めて認めた。蒋さんは05年12月に来日し、受け入れ団体の白帆協同組合（行方市）から同社に配属された。一年間の研修後、技能実習生として正式な雇用契約を結び、メッキ処理作業に従事していた。時給は最大約七百八十円で、時間外労働は二十時間を超えると同四百円と最低賃金を下回った。しかし蒋さんは掃除やペンキ塗りなどもこなし、月最大九十八時間の時間外労働をしていた。蒋さんの死亡後、同社は実際の労働時間を記録したタイムカードをシュレッダー処分した。しかし同署は夜食の購入記録や電話の通話記録に着目し、蒋さんの残業を裏付けた。一般的に外国人研修生の遺族は本国におり、労働実態を把握していないため労災申請にこぎつけることは少ない。しかし蒋さんは死亡前、中国の家族への電話で「休みが取れずつらい」と訴えていたため、昨年8月、違法な長時間労働による過労死と労災申請できた。蒋さんと同じように違法に扱われ、致死された外国人研修生はまだまだいるが、ただし日本企業側の事実を隠す行為により、遺族は違法扱いの実態をよく把握することが難しいと考えられる。外国人研修生本人も契約により、違約金などへの考慮があるため、違法の事実を公開することが難しい。今後、外国人研修生の人権を主張するために外国人研修生制度を如何に改正するかは重大な課題だと言わざるを得ない。

次に仲介留学の問題点を明確にしたい。日本は先進国としていろいろな分野にわたって世界最先端の技術を持っている。それで、発展途上国で

ある中国の一部分の人は先進的な技術や知識を学ぼうとして母国を離れ、毅然と渡日留学を選んだのである。その一方で、物価水準が世界一と言われている首都の東京を持っている日本は労働の収入も疑いなく各国の中で上位に当たる。そこで、技術や知識を学ぶより大量のお金を儲けるほうが現実的だと考える人が増え、研修生の名を借りて「淘金」を目的に日本の国土を踏んだ。嘗て１９８０年代末、日本のバブル経済が瓦解する寸前に、中国では渡日ブームが起こった。中国当時の物価は現在の十分の一にも及ばなかった。しかし、当時に日本の物価は現在とはあまり変わりがないと言えよう。それで、日本へ行ってどのように苦労しても三年、五年我慢すれば帰国して金持ちになるのではないかという考えが広がったのは難解ではない。その時、中国では「万元世帯」という言葉があり、つまり一万元を持つ家のことであり、そのような家になるのは当時の中国ではとてもかなわない夢だった。しかし、一万元は当時の東京では洗い場で一日四時間ぐらいしか働かない人にとって、時給は低いほうの千円だとしたら、ただ一カ月あまりの給料に過ぎなかった。そのような夢を抱えていた青年達は親の何年もの蓄えを尽くし、さらには家を売ったりして借金までして仲介機関に保証金を出し、ようやく留学の資格を取って夢を追い求めて渡日の飛行機に乗った。正確に、留学の資格を買ったと言えよう。しかし、現実はそのように甘くなかった。日本語がぜんぜんできなかった青年たちは日本という異様なところでは生活できるわけがなかった。進学したい人も受験に合格できず、やむを得ず日本語学校に通いながら、生計を維持するために働かなければならなかった。多額の学費を負担するため、また国の親に借金を返す分のお金を送らなければならない圧力もあるため、一年間か二年間の研修の在留期限が切れてしまってもほとんど貯金がなかったのである。夢が消え失せたと認めたくないと思い、親友の中で面子が立たなかった恥ずかしさが駆使し、青年たちは不法滞在の道を辿り始めた。正当な在留資格を失い、随時に不法入国者として中国へ送還される恐れがある青年たちは自由に帰国して両親と妻を尋ねることができず、最低等の仕事しかできないため、毎日肉体的な、精神的な重圧のもとで生活していた。長い間そのような生活を送ると、常に世界観や価値観が歪みがちである。「どうせお金のために異国に残るので、どうせ既に違法滞在なのに、できるだけ速くお金を手に入れる方法で勝負したい」と帰国した人の何人も言った。それで、男性は暴力団ややくざにかかわるようになるケースが多く、女性は常に売春婦になる。もちろん、重圧に耐えられ、八年、十年も辛抱して人間らしくない生活を送って「故郷に錦を飾る」人もいたが、極めてまれだと言わざるを得ない。つまり、一旦不法滞在に走ると、犯罪の種を撒いたに等しいのである。その根源をさかのぼると、まったく学識のない人を日本に送って「留学する」仲介留学こそ不法滞在の機会を提供したと言わざるを得ない。

外国人研修生制度と仲介留学の問題に類したさまざまなことがらは各先進国共に抱えている問題だと考えられるが、中国および東南アジアの事件費がなおさら安い発展途上国に隣接している日本にはいっそう深刻だと言わざるを得ない。まず外国人研修生制度につきましては、日本国内の労働力の配属を考慮しなくてはいけないため、単純労働力の導入はおそらく近いうちに解禁できかねるだろうと思う。将さんのような人権侵害事件の再発を防止するためには、導入する外国人研修生の入国審査を厳しく規制しなくてはいけない。営利を目的とした輸入国の仲介機関の紹介は断固遠慮すべきだ。そのほかに、政府は日本国内の企業、特に中小企業に対して、労働者の労働実態を積極的に監視し、外国人研修生をだます傾向のある契約を認めないようにすべきだと思われる。一方で、仲介留学の問題につきましては各地の日本語学校が仲介留学生の拠点になっているため、日本語学校への管理、監視が必要とされる。具体的には、受け入れられる学生の人数をきちんと制限する上、学生の出席率や満期後の帰還状況の定期の報告を求めるようにすべきだと思う。頻繁に失踪者が出る学校には受け入れられる学生の人数を下げ、必要とされる時は外国人留学生を受け入れる資格を取り消すべきだ。また、不法滞在になった学生の入国保証人の連帯責任を実際的に追及すべきだと思う。もし財政の余裕があれば、必要な程度で経済的に外国人留学生を支援するのも良い方法だと考えられる。

大学主要行事等 〈12月2日～3月31日〉

◆◆ 教職員の動向 ◆◆

◇大　学◇

《教員》

3月31日付

(定年退職)

教　授　角井　穆（システム情報学科）
教　授　原　暉之（医療情報学科）
教　授　田城　徹雄（情報メディア学科）
※4月1日付特任教授に採用予定

(退　職)

特任教授　加納　邦光（医療情報学科）
教　授　林　雄二（システム情報学科）
教　授　福島　吉春（先端経営学科）
講　師　田中　洋也（医療情報学科）

《職員》

3月31日付

(定年退職)

国際交流・留学生支援事務室長　今長　豊
※4月1日付嘱託職員に採用予定

(退　職)

事務局次長兼総務課長　風間　國康

(出向解除)

総務課長補佐　今野　正登（株式会社エスシーシー）

◆◆ 主要行事 ◆◆

◇法人本部◇

2月17日　評議員会・理事会
3月17日　eＤＣタワー竣工式
24日　評議員会・理事会

◇大　学◇

12月 4日　情報メディア学部編入学試験
10日　経営情報学部教授会
17日　情報メディア学部教授会
24日　全学教授会
29日～1月4日　冬期休業
1月 8日　月曜講義実施日
14日　経営情報学部教授会
15日～16日　大学入試センター試験
21日　情報メディア学部教授会
22日　南京大学外国語学院聴講生学部・学科・専攻入学試験
28日～29日　合同試験期間
28日　全学教授会
2月 2日～ 3日　一般１期入学試験
7日～17日　集中講義
10日　経営情報学部教授会
18日～24日　追再試験期間
18日　カリキュラム・アドバイザリーボード会議
14日　情報メディア学部教授会
21日　大学説明会（東京）
28日　全学教授会
3月 3日　企業・病院説明会
4日　教育ＧＰ成果フォーラム
8日　臨時経営情報学部教授会
臨時情報メディア学部教授会
情報メディア編入学試験（３次募集）
15日　経営情報学部教授会
情報メディア学部教授会
16日　一般２期入学試験
18日　学位記授与式
25日　全学教授会

◇大学院◇

12月13日～15日　学位論文等 事前審査会
1月31日　学位論文等 公開発表会
2月12日　大学院入学者選抜試験（２次募集）
24日　研究科委員会
3月 8日　研究科委員会
9日　奨学金返還免除候補者選考委員会
17日　学位論文等 事前審査（再）
29日　研究科委員会

◇通信教育部◇

12月 6日～10日　後期ＩＰメディア授業科目試験
17日　春期第３回入学選考
17日～19日　後期地方スクーリング（１）
1月14日～16日　後期地方スクーリング（２）
22日～23日　後期印刷・インターネットメディア授業科目試験②
28日　春期第４回入学選考
2月 1日～ 3日　冬期スクーリング（１）
7日～ 9日　冬期スクーリング（２）
25日　春期第５回入学選考
3月18日　学位記授与式、春期第６回入学選考
31日　春期第７回入学選考

◆◆ 広報活動 ◆◆

＜進学相談会＞

12月：北海道　12会場（江差、八雲、苫小牧、倶知安、留萌、札幌(3)、旭川(2)、釧路、帯広）
1月：北海道　５会場（枝幸、紋別、網走、中標津、滝川）
2月：北海道　５会場（浦河、静内、函館、名寄、稚内）
東京都　１会場（蒲田）
3月：北海道　４会場（釧路、帯広、室蘭、岩見沢）

＜高校内ガイダンス＞

12月：北海道　７校（札幌北斗高校、札幌藻岩高校、札幌創成高校、江別高校、伊達緑丘高校、札幌新陽高校、札幌第一高校）
神奈川県１校（横浜創学館高校）
1月：北海道　１校（北広島西高校）
2月：北海道　１校（旭川大学高校）
栃木県　１校（作新学院高校）
埼玉県　１校（埼玉栄高校）
千葉県　１校（柏日体高校）
3月：神奈川県１校（立花学園高校）

＜高校内進路講演会＞

12月：北海道　６校（札幌東商業高校、浜頓別高校、上川高校、厚岸翔洋高校、武修館高校、伊達高校）
1月：北海道　３校（名寄産業高校、釧路明輝高校、室蘭東翔高校）
2月：北海道　３校（旭川明成高校、室蘭大谷高校、江陵高校）
3月：北海道　５校（下川商業高校、札幌南陵高校、札幌東豊高校、名寄産業高校、釧路東高校）

＜高校出張講義＞

12月：北海道　１校（斜里高校）
1月：北海道　１校（札幌丘珠高校）
2月：北海道　１校（旭川龍谷高校）
3月：北海道　１校（富良野高校）

＜高校訪問＞

12月：北海道 130校、青森県30校、埼玉県5校、千葉県1校、東京都9校、神奈川県3校
1月：北海道　3校、茨城県2校、栃木県1校、埼玉県7校、千葉県1校、東京都6校、神奈川県4校
2月：北海道 118校、埼玉県2校
3月：北海道　99校、東京都1校

＜オープンキャンパス＞

3月20日　本学

＜入試説明会＞

12月12日　本学

＜北海道情報大学通信教育部 入学説明会；本学独自＞

12月；４会場（東京、名古屋、大阪、本学）
1月；２会場（東京、福岡）
2月；１会場（東京）
3月；２会場（東京、本学）

＜北海道情報大学通信教育部 合同入学説明会；私立大学通信教育協会主催＞

2月；11会場（東京、横浜、新潟、名古屋、大阪、岡山、広島、北九州、福岡、仙台、札幌）

◆◆ 主な来学者 ◆◆

◇大　学◇

2月23日　中国 江蘇三源教育事業有限公司一行

◇広報室来学者◇

12月 9日　千歳北陽高校（大学見学会：生徒２７名、教員１名）
12月10日　北広島西高校（大学見学会：生徒８名、教員１名）
1月30日　小樽桜陽高校（生徒１名、保護者１名）
2月 9日　釧路明輝高校（学校長１名）

◇国際交流・留学生支援事務室◇

2月 4日　中国中央電視台（CCTV）の取材班３名
①総監督　陳　去病（チンキョウビョウ）
②レポータ　武　文昭（ウーブンショウ）
③カメラマン　王　梓（ワンズー）
24日～25日　南京大学との学術交流「ｅラーニング、教育工学研究」で４名
①謝　俊元（シャ　シュンゲン：南京大学計算機科学・技術学部　教授）
②尤　学貴（ユウ　ガクキ：江蘇省電化教育館　館長）
③戴　超（タイ　チョウ：江蘇三源教育実業有限株式会社）
④田　又豊（デン　ユウホウ：江蘇三源教育実業有限株式会社）

編集後記

このたびの東日本大震災で被災された多くの人々に心からお悔やみ、お見舞い申し上げます。福島の原発事故も予断を許さない状況ですが、これ以上の被害が出ないように祈るばかりです。復興までの道のりが険しいからこそ、何とか力を合わせてこの悪夢を乗り越えていきたいものです。想定外の厳しい春となりましたが、それはともかく、長年情報大のために尽力されて退職される教職員の皆様、まずはお疲れ様でした。（U）

学内報について、ご意見、ご要望などがございましたらnanakamado@do-johodai.ac.jpまでお寄せ下さい。